

千葉県内における社会的養護経験者等の実態把握調査報告書

令和 7 年 10 月 13 日

ちば子ども若者ネットワーク

はじめに

本調査は「ちば子どもネットワーク」において千葉県内における社会的養護経験者等の若者支援の充実に向け、若者達の実態や支援ニーズをより詳細に把握し、今後の施策改善につなげることを目的として実施したものです。

調査にあたっては、令和２年に実施された国の全国調査を踏襲しつつその対象を拡充し、社会的養護経験者等の若者の自記式アンケートやインタビュー調査を行うとともに、当該若者の支援に従事する支援機関・支援者を対象としたインタビュー調査を実施しました。

本調査の結果が千葉県内における社会的養護経験者等の若者支援の更なる充実にために活用されることを期待します。

報告書の構成

- 1 千葉県・千葉市施設や里親家庭等で生活していた方の生活やサポートに関する調査
- 2 社会的養育経験者等の支援者・養育者に対する調査

ちば子ども若者ネットワークとは

千葉県内の子ども若者支援に従事する支援者と子ども若者当事者によるネットワークコミュニティ。子ども若者支援者と子ども若者の共同創造をスローガンに居場所活動や子ども若者支援に関する広報啓発活動等を行っています。現在は一般社団法人 Void が運営事務局を務めています。

令和２年頃より任意団体としての活動を始め、令和３年６月より休眠預金等活用制度による助成金を原資として千葉県内の１０代後半から２０代の子ども若者支援充実のためのネットワーク形成事業を始め、ちばアフターケアネットワークステーション、千葉県児童福祉施設協議会、千葉県中核地域生活支援センター連絡会等とも連携しながら活動を進めてきました。本調査は当該ネットワーク形成事業の一環として実施したものです。

千葉県・千葉市施設や里親家庭等で生活していた方の
生活やサポートに関する調査
第三報（2025 年 10 月）

千葉県における社会的養育経験者等の実態調査 WG チーム

目次

第1章 調査の実施概要	1
1. 背景・目的	1
2. 調査の内容	1
(1) 生活状況や自立支援施策に関するアンケート調査	1
(2) ケアニーズに関するインタビュー調査	2
3. 調査体制	2
4. 倫理的配慮	2
5. 調査の助成	2
第2章 アンケート調査の概要	3
1. 調査の目的	3
2. 調査対象	3
3. 調査方法	3
4. 倫理的配慮、工夫点	3
5. 調査実施期間	3
2. 回答の件数	4
第3章 アンケート調査の結果	5
1. 回答者の基本情報	5
(1) 最後に生活していた施設等	5
(2) 最後に生活していた施設等の場所	5
(3) 現在の居住先	5
(4) 性別	6
2. 生活の状況	6
(1) 現在の仕事・学校（複数回答）	6
(2) 現在の収支	6
(3) 健康状況	6
3. つながり	7
(1) この1年間の施設等との連絡頻度	7
(2) 困った時の相談相手（複数回答）	7
4. サポートの状況	8
(1) 退所時にうけたサポート（複数回答）	8
(2) 退所後にうけたサポート	8
(3) 施設等の評価	9
(4) 退所後のサポートの評価	10
(5) 退所前の不安・心配	11
(6) 現在、困っていること	11
(7) サービスの利用状況	12
(8) 今後利用したいサポート	12
第4章 インタビュー調査の概要	13
1. 調査の目的	13
2. 調査対象	13
3. 調査項目	13
4. 倫理的配慮、工夫点	13

5. 調査実施期間	14
第5章インタビュー調査の結果	15
1. 対象者	15
(1) 性別	15
(2) 平均年齢	15
(3) 社会的養護の経験	15
(4) 入所期間（最後に生活していた施設等）	16
(5) 合計期間(施設等で生活していた期間全体)	16
(6) 最終学歴	16
(7) 現職	17
2. 分析方法	17
3. 措置解除後の生活について	17
(1) 住まい・生活の状況	17
(2) 家計の状況	18
(3) 就学の状況	20
(4) 就労の状況	21
(5) 心身の健康状態	23
(6) 里親・施設とのつながり	25
(7) 原家族とのつながり	27
(8) 新しい家族とのつながり	28
(9) 他人とのつながり	29
(10) 今目標としていること	30
(11) 里親・施設でのポジティブな経験	32
(12) 里親・施設でのネガティブな経験	35
(13) これまで受けたサポート	39
(14) もっと経験したかったこと・改善が必要なこと	44
第6章 本調査のまとめと提言	51
1. 複合的困難、生活の危機	51
2. 生活水準と家計および住居	52
3. 進学に関する情報保障と伴走支援の必要性	52
4. 心身の不調と支援の継続性	52
5. 原家族との関係性と将来展望への影響	52
6. 里親・施設等の事情による措置変更に伴う子どもの負担の大きさ	53
7. 支援へのアクセスと支援者の役割	53
8. 社会的養護と子どもの権利	53

第1章 調査の実施概要

1. 背景・目的

社会的養護においては、児童養護施設等への入所措置や里親委託等を解除された者(以下、「措置解除者等」という。)に対する自立支援施策の充実が求められている。そのためには措置解除者等の生活状況やケアニーズの把握が必要であることから、国では平成30年度より全国調査のあり方を検討し、令和2年度には本邦初となる「児童養護施設等への入所措置や里親委託等が解除された者の実態把握に関する全国調査」(以下、「全国調査」という。)が実施された。

全国調査の結果は実施に協力した各都道府県へ還元されており、千葉県・千葉市でも措置解除者等の実態に関する一定の知見が得られているが、他方で全国調査の結果のみで自立支援施策を検討する際の限界も指摘されている(対象が措置解除後5年間と比較的短期間に留まる、措置解除者等本人の回答率は全国より高いものの約8割が未回答、県独自の自立支援施策への評価が得られていない等)。そのため本調査研究では、これまでの国の調査研究事業で得られた成果等を踏まえながらも、それと重複しない形で措置解除者等の実態を広範に把握するとともに、より詳細な生活状況や自立支援ニーズを整理・考察する。これにより、千葉県・千葉市の自立支援施策のさらなる充実やケア実践の質の向上とともに、家庭養育のさらなる普及・促進を図ることを目的として実施した。

2. 調査の内容

(1) 生活状況や自立支援施策に関するアンケート調査

千葉県における社会的養護の経験がある措置解除者等本人を対象に、現在の生活状況や支援ニーズに関するアンケート調査を行った。現在の生活状況については、全国調査の調査結果との重複を考慮し、また先行して実施された大分県での調査結果を踏まえて調査項目を設定した。

なお、今回の調査では、2024年4月より社会的養護自立支援拠点事業が開始され、その対象が拡充されることから、2013(平成25)年4月から2023(令和5)年3月のあいだに、中学校卒業以上で社会的養護(自立援助ホームを含む)を措置解除となった①千葉県内の施設や里親家庭等で生活していた方、②千葉県内の児童相談所の一時保護またはそれに準じる経験(民間シェルターの利用等)をされた方、③他の都道府県の施設や里親家庭等での生活や一時保護等を経験した後、現在千葉県内にお住まいの方、とした。その際の措置解除理由は問わない。①に該当する対象者の人数は以下となる。なお、②及び③に該当する方の人数は把握できない。

種別区分	対象者数
児童養護施設	830人
児童自立支援施設	158人
児童心理治療施設	7人
自立援助ホーム	188人
ファミリーホー	27人
里親	157人
合計	1367人

(2) ケアニーズに関するインタビュー調査

アンケート調査にインタビューに協力可能と回答のあった措置解除者等を対象として、回答内容の詳細な状況を把握する個別のインタビュー調査を行った。措置解除後から現在における生活の状況や自立支援施策・ケアの利用状況及びそのニーズ、過去に経験した社会的養護を振り返って感じるについて聞き取りを行った。

調査協力者は 31 名で全員が千葉県・千葉市の社会的養護を経験した方々であった。

3. 調査体制

本調査を実施するにあたり、措置解除後の生活実態や自治支援に詳しい社会的養護経験者及び支援者、研究者等の有識者からなるワーキングチームを設置した。

【構成員】(50 音順、敬称略)

荒川 美沙貴	社会的養護経験者向け情報ウェブサイト Iris 代表
伊部恭子	佛教大学 教授
畑山 麗衣	NPO 法人 Giving Tree ピアカウンセラー
長瀬 正子	佛教大学 准教授
永野 咲	武蔵野大学 准教授
齊田由美	ちばアフターケアネットワークステーション (事務局)
佐藤 葵	子どもの虹情報研修センター
新藤こずえ	上智大学 教授
谷口由希子	名古屋市立大学 准教授
安井飛鳥	ちば子ども若者ネットワーク

4. 倫理的配慮

本調査研究の実施にあたっては、構成員が所属する武蔵野大学の倫理審査によって承認を得た (倫理審査番号 2023-24-01)。

5. 調査の助成

本調査実施にあたっては、以下の助成を一部使用している。

・休眠預金活用事業「社会的養護下にある若者に対する社会包摂システム構築事業」(分配団体 公益財団法人ちばのWA地域づくり基金) 助成金

・科学研究費基盤研究 B「ケアリーバー調査におけるデータ収集と評価システム構築のための開発的研究」課題番号：24K00345 (代表 永野 咲)

・基盤研究 B「社会的養護を 18 歳未満で措置解除された若者の重なり合う困難と家族形成に関する研究」課題番号：23K22208 (代表 長瀬正子)

第2章 アンケート調査の概要

1. 調査の目的

児童養護施設等への入所措置や里親委託等を解除された者(以下、「措置解除者等」という)の生活状況や生活上の課題、支援ニーズ等を把握・整理することを目的として、本人を対象に、現在の状況をたずねるアンケート調査を実施した。

2. 調査対象

2013(平成25)年4月から2023(令和5)年3月のあいだに、中学校卒業以上で社会的養護(自立援助ホームを含む)を措置解除となった①千葉県内の施設や里親家庭等で生活していた方、②千葉県内の児童相談所の一時保護またはそれに準じる経験(民間シェルターの利用等)をされた方、③他の都道府県の施設や里親家庭等での生活や一時保護等を経験した後、現在千葉県内にお住まいの方

3. 調査方法

- ・ 措置解除者等本人を回答者とする Web 調査とした。
- ・ 本人への調査協力依頼は、ちば子ども若者ネットワークを経由し、最後に生活した児童養護施設、児童自立支援施設、児童心理治療施設、ファミリーホーム、自立援助ホーム、里親家庭(以下、「施設等」とする)から案内した他、支援機関からの電子メール・SNS で Web サイトを案内いただいた。
- ・ 調査対象者のリストアップと施設等への依頼は、県にご協力いただいた。

4. 倫理的配慮、工夫点

- ・ 倫理的配慮として、調査実施前に、1 研究の目的、2 匿名性とフプラバシーの確保、3 回答の自由(無回答、中断も可能)、4 問い合わせ先の確認後、回答をいただいた。
- ・ 支援が必要な人への情報提供として、調査の冒頭と最後に、県内外の措置解除者等の支援先として、社会的養護自立支援事業「ちばアフターケアネットワークステーション(CANS)」、「ちば子ども若者ネットワーク」と「社会的養護経験者向け情報ウェブサイト Iris」(<https://irisconnect.jp/>)を案内した。
- ・ 回答者には謝礼を送付した。Web 調査であることから、謝礼は、オンラインギフトカードのメール送付とした。
- ・ 調査項目は回答者の負担軽減のため、設問数の絞り込みを行った。また、今後の目標や生活における希望、願望を尋ねる設問を終盤に設定することで、ポジティブな気持ちで回答を終了できるように配慮した。
- ・ 本調査研究の実施にあたっては、構成員が所属する武蔵野大学の倫理審査によって承認を得た(倫理審査番号 2023-24-01)。

5. 調査実施期間

- ・ 回答期間は、2023 年 11 月 20 日~2024 年 1 月 11 日

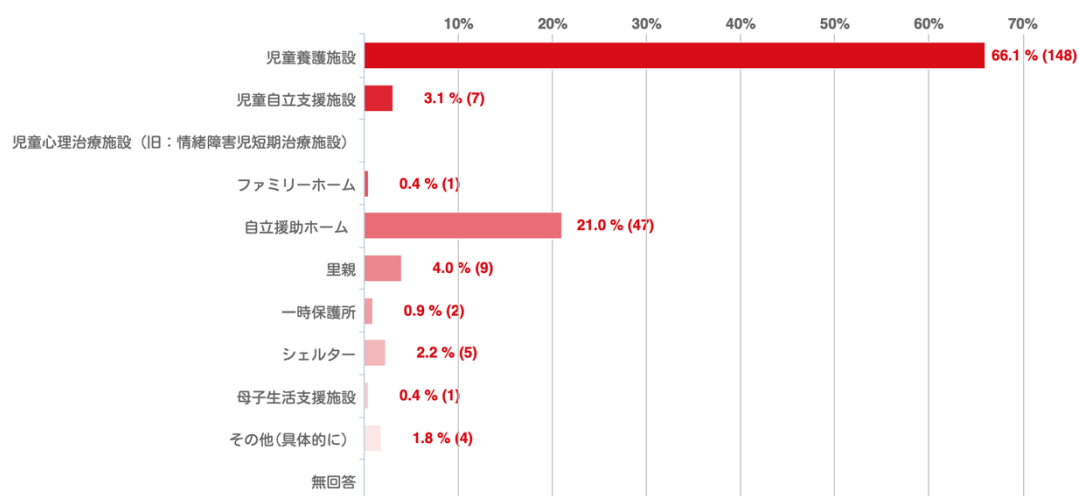
2. 回答の件数

- ・合計で 224 名の回答が得られた。

第3章 アンケート調査の結果

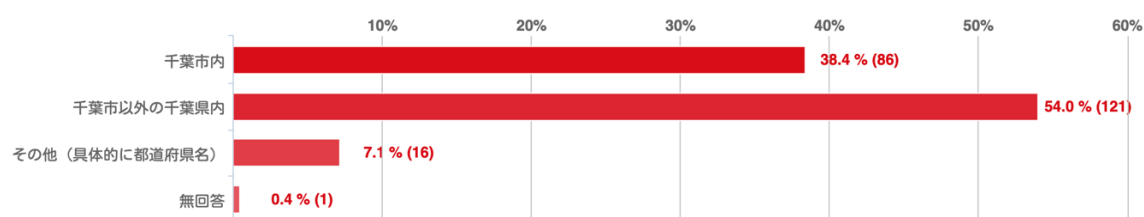
1. 回答者の基本情報

(1) 最後に生活していた施設等

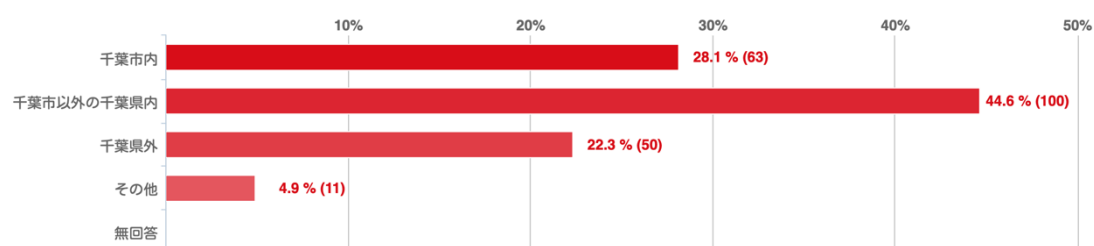


・このうち、児童養護施設の6名、自立援助ホームの6名、シェルターの1名、その他の1名は、千葉市・千葉県内以外の施設を経験したと回答している。

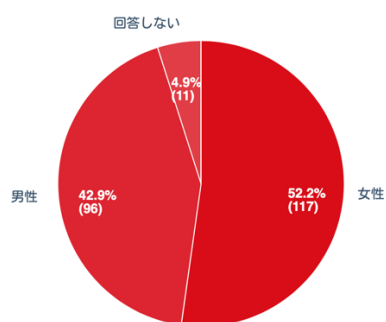
(2) 最後に生活していた施設等の場所



(3) 現在の居住先



(4) 性別

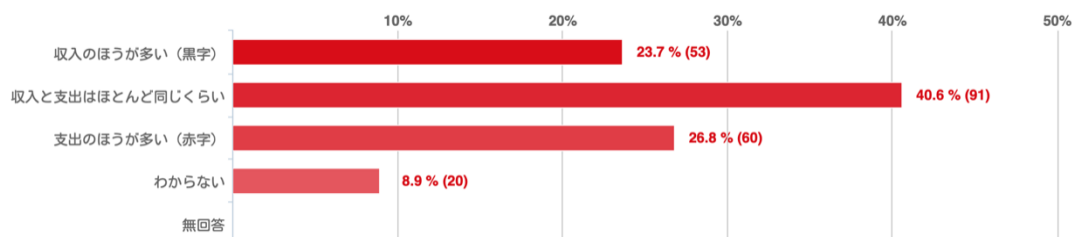


2. 生活の状況

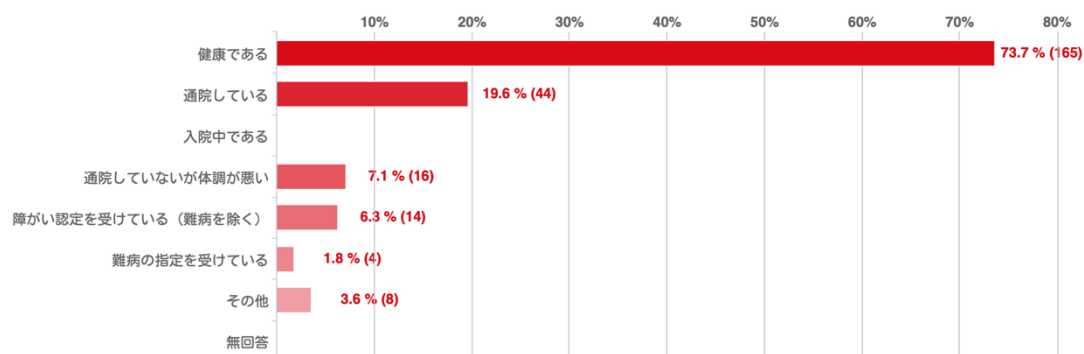
(1) 現在の仕事・学校（複数回答）



(2) 現在の収支

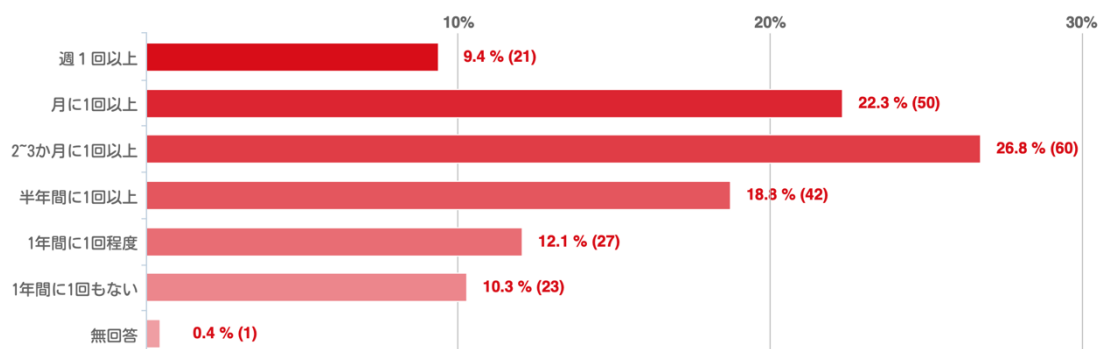


(3) 健康状況

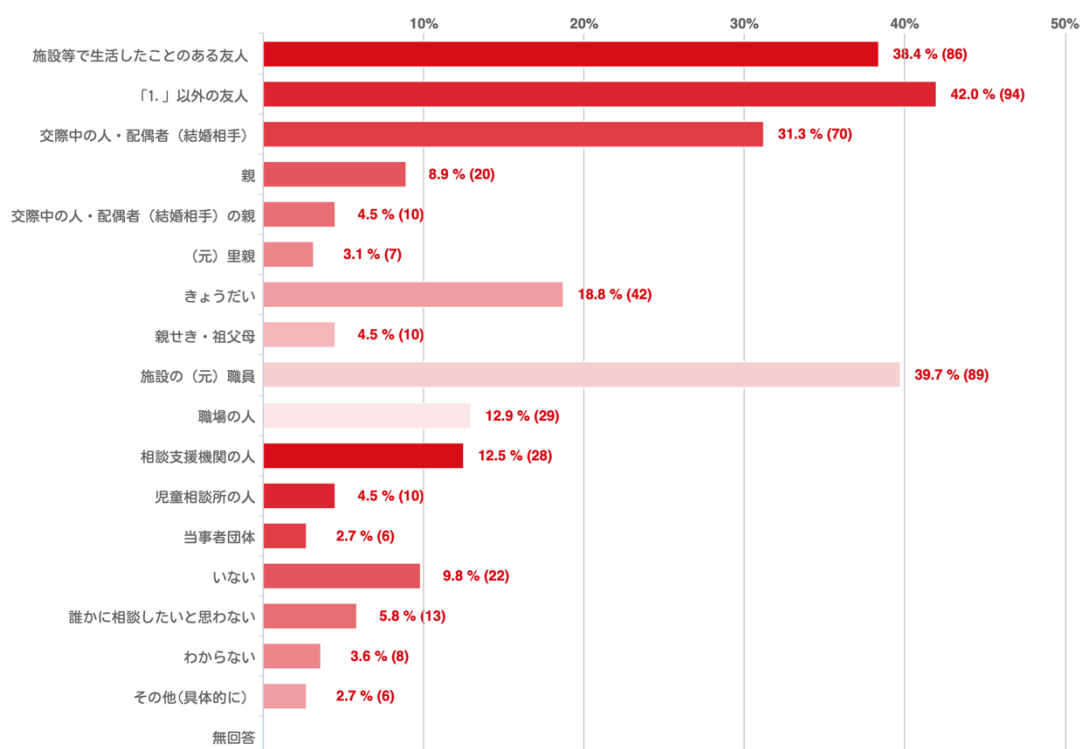


3. つながり

(1) この1年間の施設等との連絡頻度

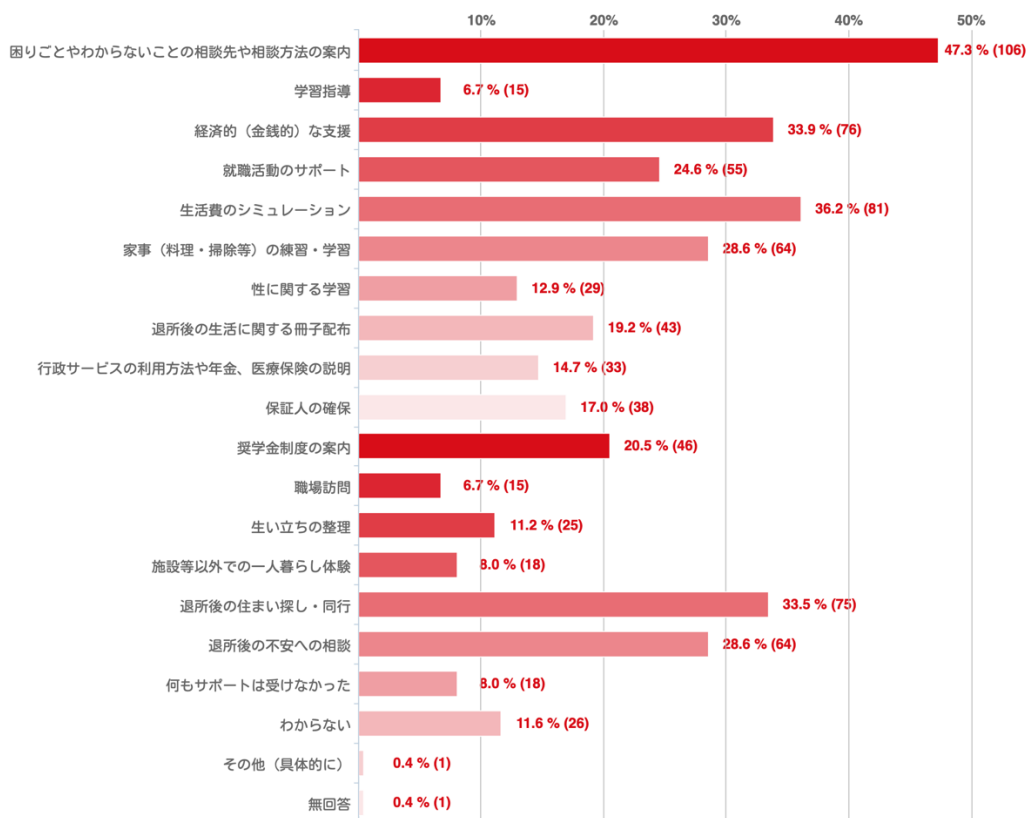


(2) 困った時の相談相手（複数回答）

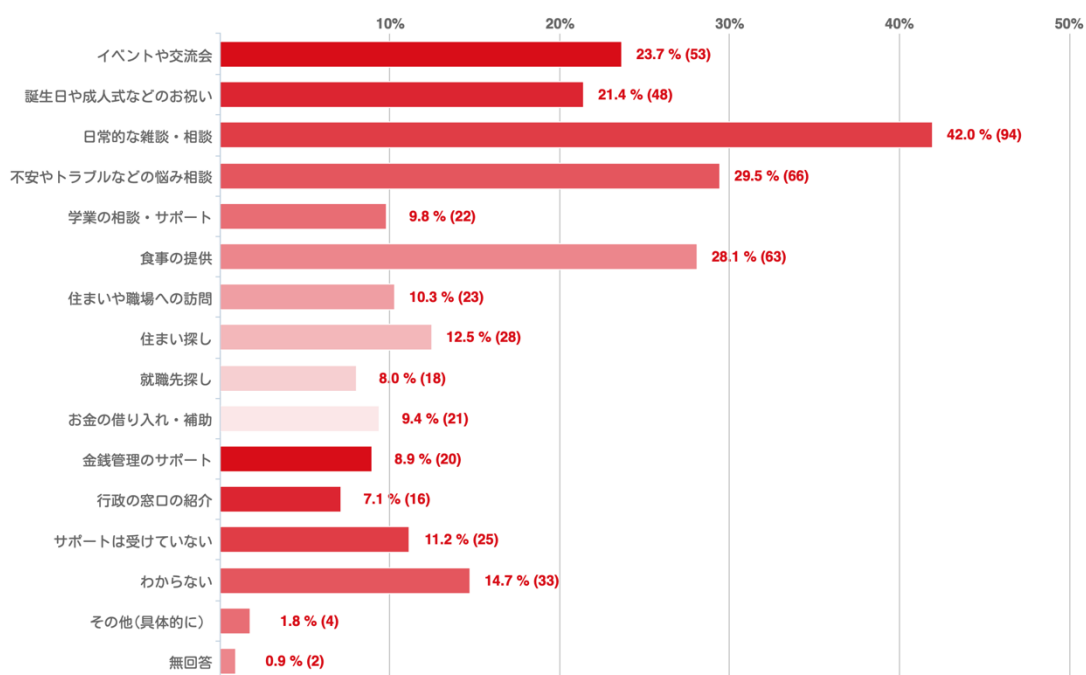


4. サポートの状況

(1) 退所時にうけたサポート（複数回答）



(2) 退所後にうけたサポート



(3) 施設等の評価

①児童相談所の職員の対応

(回答数: 224)

☐ よかった
 ☐ まあよかった
 ☐ どちらともいえない
 ☐ あまりよくなかった
 ☐ よくなかった
 ☐ わからない・おぼえていない
 ☐ 利用したことがない
 ☐ 無回答



②一時保護所での生活・職員の対応

(回答数: 224)

☐ よかった
 ☐ まあよかった
 ☐ どちらともいえない
 ☐ あまりよくなかった
 ☐ よくなかった
 ☐ わからない・おぼえていない
 ☐ 利用したことがない
 ☐ 無回答



③施設等での生活・施設職員等の対応

(回答数: 224)

☐ よかった
 ☐ まあよかった
 ☐ どちらともいえない
 ☐ あまりよくなかった
 ☐ よくなかった
 ☐ わからない・おぼえていない
 ☐ 利用したことがない
 ☐ 無回答



(4) 退所後のサポートの評価

①退所後の施設等からのサポート

(回答数: 224)

☐ よかった
 ☐ まあよかった
 ☐ どちらともいえない
 ☐ あまりよくなかった
 ☐ よくなかった
 ☐ わからない・おぼえていない
 ☐ 利用したことがない
 ☐ 無回答



②ちばアフターケアネットワークステーションCANSからのサポート

(回答数: 224)

☐ よかった
 ☐ まあよかった
 ☐ どちらともいえない
 ☐ あまりよくなかった
 ☐ よくなかった
 ☐ わからない・おぼえていない
 ☐ 利用したことがない
 ☐ 無回答



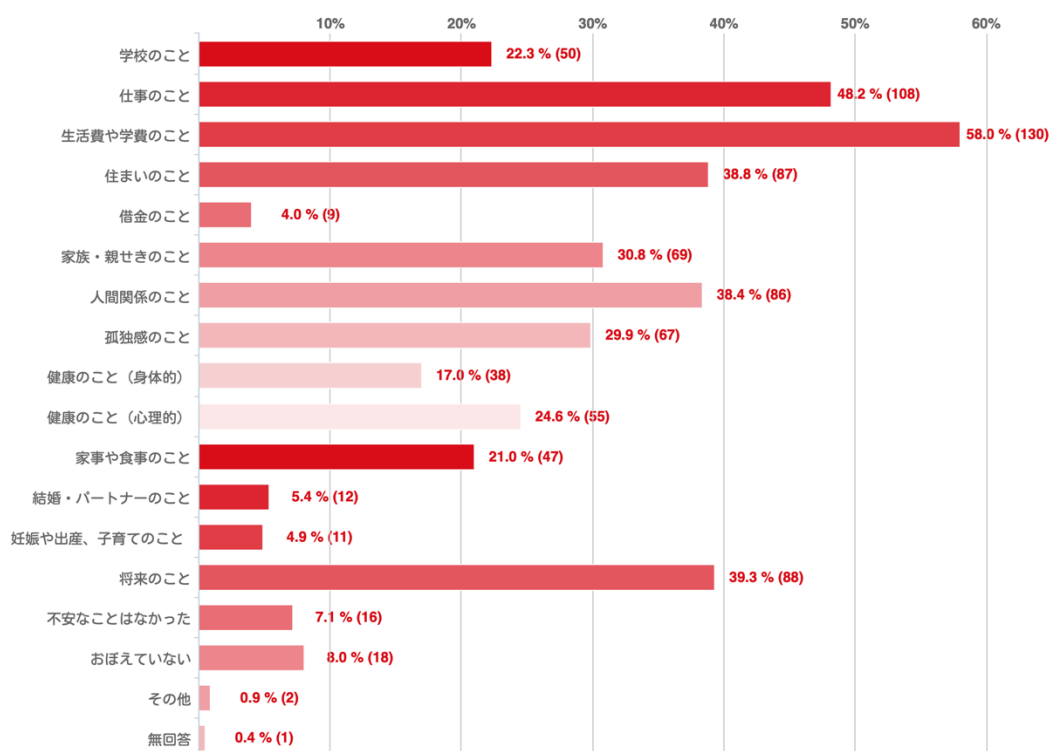
③上記以外からの公的なサポート ※施設や里親家庭以外の役所、福祉事務所、保健所、自立支援事業所、児童相談所などのことです。

(回答数: 224)

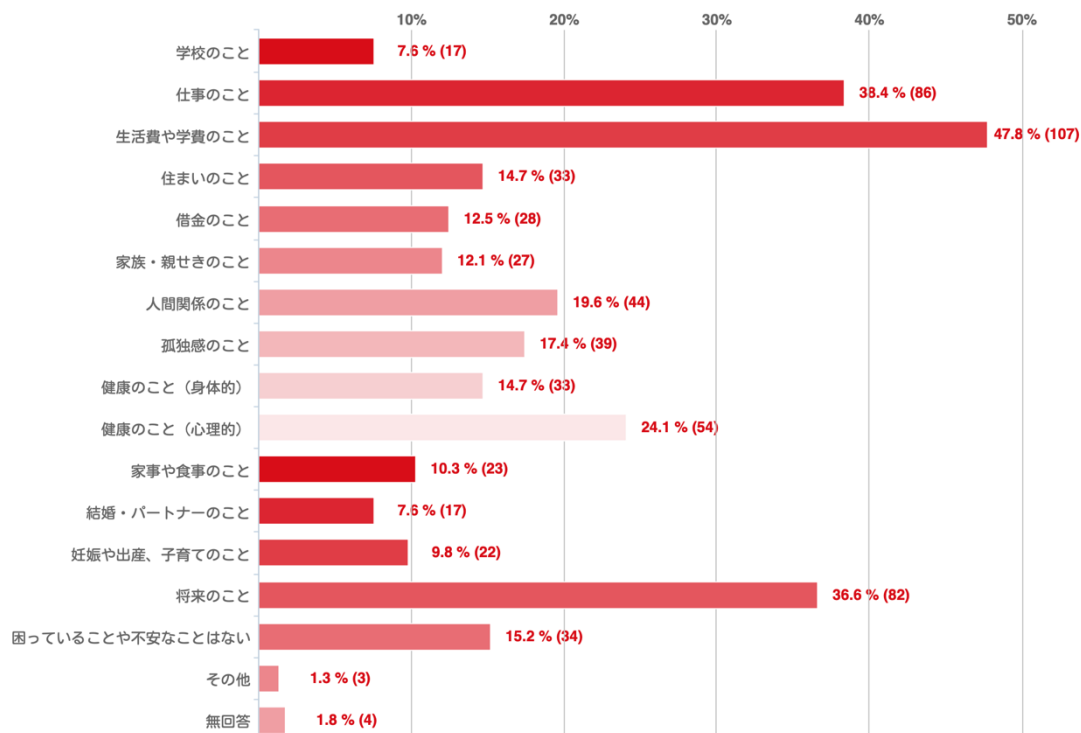
☐ よかった
 ☐ まあよかった
 ☐ どちらともいえない
 ☐ あまりよくなかった
 ☐ よくなかった
 ☐ わからない・おぼえていない
 ☐ 利用したことがない
 ☐ 無回答



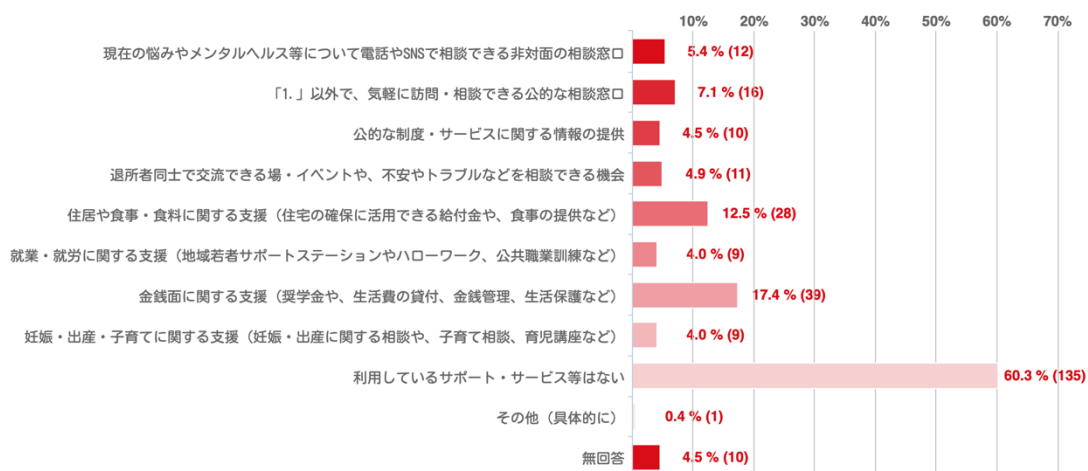
(5) 退所前の不安・心配



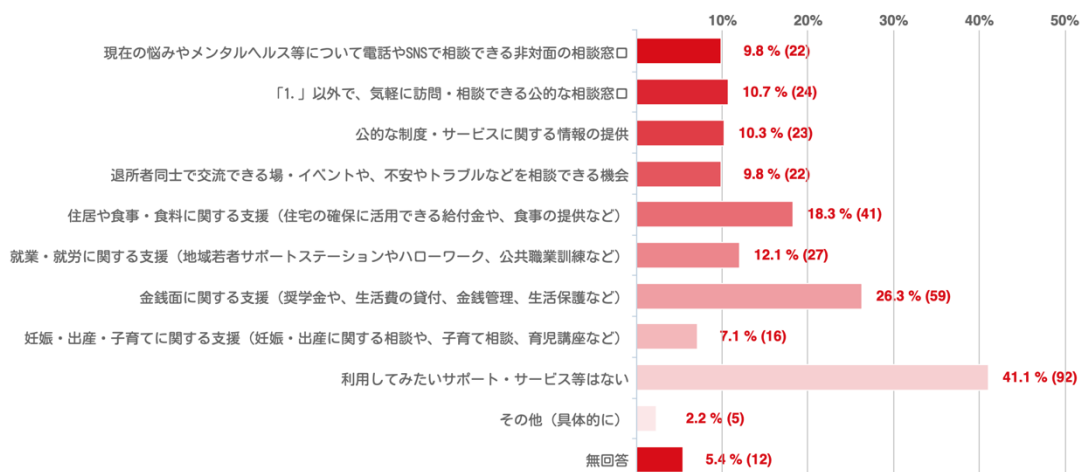
(6) 現在、困っていること



(7) サービスの利用状況



(8) 今後利用したいサポート



第4章 インタビュー調査の概要

1. 調査の目的

千葉県・千葉市の措置解除者等の生活状況や自立支援施策・ケアの利用状況・ニーズ、経験してきた社会的養護を振り返って感じる事等について聴き取りを行い、現在の状況に影響を及ぼす社会的養護の要素・ケアの内容、自立支援のニーズ、ケアの提供にあたり関係機関が留意すべき事項等を整理することを目的として実施した。

2. 調査対象

アンケート調査で協力可能の申し出があった千葉県・千葉市の措置解除者等

3. 調査項目

- ・アンケート調査の設問について、詳細に状況を聴取した。調査項目は以下のとおり。
- ・ワーキングチーム複数名による、オンラインでの個別インタビュー(半構造化面接)とした。

1.現在の生活状況について

- ・住まい/家計/就労・就学/健康状態/里親・施設とのつながりの5項目における現在の状況、感じていること

2.ケアニーズについて

- ・生活をおくるうえでの困りごと、不安
- ・現在受けているサポート内容、きっかけ、感じていること
- ・目標や実現したいこと、実現のために必要なサポート

3.社会的養護の経験について

- ・いまの自分・生活に役立っている社会的養護の経験、その理由
- ・いまの自分・生活を踏まえ、社会的養護で経験しておきたかったこと、その理由

4.関係機関へのメッセージについて

- ・千葉県・千葉市の里親家庭・施設の関係者に伝えたいこと

4. 倫理的配慮、工夫点

- ・調査実施前には、対象者に対して、1 研究の目的、2 インタビューの進め方、3 匿名性とプライバシーの確保、4 守秘義務、5 参加の自由、6 回答の撤回方法、7 問い合わせ先を確認していただき、オンラインフォームで同意を得ている。また、ヒアリング開始直前にも再度口頭で同意確認を得ている。
- ・調査実施後には、調査実施後に支援を受けることができるよう支援機関の案内を行った。
- ・調査協力者には Web 調査であることから、謝礼(オンラインギフトカード)の送付を行った。
- ・調査項目は回答者の負担軽減のため、設問数の絞り込みを行った。また、今後の目標や生活における希望、願望を尋ねる設問を終盤に設定することで、ポジティブな気持ちで調査を終了できるように配慮した。

5. 調査実施期間

2024 年 1 月 25 日~2024 年 3 月 9 日

第5章インタビュー調査の結果

1. 対象者

インタビューの協力が得られた対象者は、以下の31名であった。いずれも千葉県・千葉市の社会的養護を経験した方々である。以下にインタビュー協力者の基本属性を示す。

(1) 性別

- ・男性：12人(38.7%)
- ・女性：19人(61.3%)

(2) 平均年齢

- ・全体：22.1歳
- ・男性：22.3歳(最高：29歳 最低：18歳)
- ・女性：21.9歳(最高：31歳 最低：18歳)

(※注：表中空欄箇所はアンケート調査票またはインタビュー調査回答内容を反映)

(3) 社会的養護の経験

施設等	N=31(人)
児童養護施設	14
自立援助ホーム	6
複数の施設（措置変更含む）	5
里親家庭	2
障害児入所施設	1
母子生活支援施設	1
子どもシェルター	1
ファミリーホーム	1

上の表にある経験した施設等は、インタビュー協力者が社会的養護を離れる直前に経験した施設等である。インタビューでは、複数回の措置先変更や措置解除後に再び措置された経験者は8人であった。

具体的には、最初の措置先が児童養護施設であったケースについては、「a.児童養護施設→在宅引き取り→児童養護施設」の経験が2ケースあり、そのうち1ケースは最初の施設と次に入所した施設は別の施設であった。「b.児童養護施設→自立援助ホーム」、「c.児童養護施設→母子生活支援施設」というケースがみられた。

また、里親から措置変更となったケースでは、「d.里親→児童養護施設→自立援助ホーム」、「e.里親→児童養護施設」、「f.里親→ファミリーホーム」、「g.里親→自立援助ホーム」があり、里親の事情や折り合いが悪くなった等の理由により児童養護施設や自立援助ホームの利用に変更となっていた。加えて、社会的養護の利用に至るまでの経緯やそれまでの家族との関係、社会的養護に至る以前の学校生活についても話してくださった方々がいるが、本報告書の主旨及びプライバシー保護の観点から

記載しない。

(4) 入所期間（最後に生活していた施設等）

入所期間	N=31(人)
1 年未満	7
1～2 年未満	3
2～4 年未満	5
4～6 年未満	3
6～8 年未満	3
8～10 年未満	0
10～12 年未満	3
12～14 年未満	1
14～16 年未満	4
16～18 年未満	2

(5) 合計期間(施設等で生活していた期間全体)

合計期間	N=31(人)
1 年未満	6
1～2 年未満	4
2～4 年未満	5
4～6 年未満	3
6～8 年未満	4
8～10 年未満	0
10～12 年未満	3
12～14 年未満	1
14～16 年未満	3
16～18 年未満	2

(6) 最終学歴

最終学歴	N=31(人)
高校在学中(通学・通信)	2
高校中退	2
高卒	15
高卒(大学中退)	1
高卒(短大中退)	2
専門学校卒	1
専門学校卒 (中退)	1

専門学校卒（未確定）	1
高卒＋専門学校卒	2
大学在学中	1
大学卒業	3

（７） 現職

現職	N=31(人)
働いている(正規・非正規)	21
生活保護受給中(働いている/障害福祉サービス事業所 B/無職)	5
学生 (含、バイト)	3
専業主婦	2

２．分析方法

分析の作業手順は次の通りである。まず、ヒアリングの録音データから逐語録を作成した。その際、個人が特定され得る情報は全てアルファベットや記号に置き換えた。次に、逐語録から、調査目的に該当する語りを抽出し、質的データ分析ソフト NVivo14 を用いてコーディングを行なった。コーディングには質的データ分析（佐藤 2008）を参考に、先行調査（大分県）で得られたコードを基本とした上で、本調査独自のコードも付与した。

分析作業は、質的データ分析の経験を有する研究者 5 名で行い、コードとカテゴリーの設定について相互に検討を行いながらコーディングを実施した。その結果、14 のカテゴリーとコードが得られた。本報告書においては、カテゴリー【】、コード<>で表記する。ただし、カテゴリー【もっと経験したかったこと・改善が必要なこと】については、内容が多岐にわたるため、下位コード[]として記載した。また、対象者の語りを引用する際には、『』で表記し、固有名詞の置き換え、説明文の追加等を行った場合は、“”で表記する。

３．措置解除後の生活について

（１） 住まい・生活の状況

まず、【住まい・生活の状況】は、＜金銭的な制約・負担＞＜保証人の確保＞といった困難の状況、居住先や転居の状況、住環境の困りごとと支援についての 15 のコードで構成された。

カテゴリー	コード
住まい・生活の状況	金銭的な制約・負担
	保証人の確保
	一人暮らしへの不安
	アパート・マンションでの一人暮らし
	原家族との同居
	結婚相手・パートナーとの居住
	社員寮・学生寮への居住
	福祉施設・グループホームへの居住
	仕事・学校と合わせた転居

	措置解除時からの転居なし
	住居を選ぶ基準
	住居探しの支援なし
	住環境の困りごとなし
	住環境の改善したい点

1) 一人暮らしの金銭的な制約・負担、保証人の確保、一人暮らしへの不安

まず、＜金銭的な制約・負担＞＜保証人の確保＞、家事の苦手意識などの＜一人暮らしへの不安＞といった困り事が語られた。「私の場合は親とか家族が頼れる人がいないので、保証人とかの問題もちょっといろいろ大変でした」と語られるように、保証人の確保の難しさは従来から指摘されている課題でもある。

2) 居住先の状況

また、＜アパート・マンションでの一人暮らし＞、＜原家族との同居＞、＜結婚相手・パートナーとの居住＞、＜社員寮・学生寮への居住＞、＜福祉施設・グループホームへの居住＞といった、居住先についての語りがみられた。平均年齢 22 歳の回答者の中でも、結婚相手やパートナーと同居することで生活を何とか成り立たせている様子も伺えた。

3) 転居とその条件

転居については、＜仕事・学校と合わせた転居＞がある一方で、＜措置解除時からの転居なし＞といった数年間安定して居住している回答者の様子もあった。また、施設・里親からの距離など＜住居を選ぶ基準＞についての語りもあった。『実家も古い家で、到底この家と比べものにならないようなぐらい古い家だったので、家っていうことに多分コンプレックスを持っていたのかなっていうふうには思います。ここを借りる時も、そこを重視して選んだ』と語られるようなこれまでと違う新しい暮らしを築くことで、自分の人生を歩んでいる様子もあった。

4) 住環境の困りごとと支援

住まいについての＜住環境の困りごとなし＞と語った方もいる一方で、＜住居探しの支援なし＞によって困難を抱えた方、騒音などの近隣とのトラブルなど＜住環境の改善したい点＞についての語りもあった。

(2) 家計の状況

【家計の状況】は、＜余裕の家計の状況＞を示すものや、困難の様子などの 9 つのコードで構成された。

カテゴリー	コード
家計の状況	余裕のない家計
	金銭管理の困難
	節約の工夫
	学費の確保・奨学金の返済
	目標のための貯蓄
	インフォーマルな経済的支援
	借金・自己破産
	生活保護の利用
	経済的な困りごとはない

1) 余裕のない家計と金銭管理の困難、節約の工夫

まず、『やっぱり若いうちはほんとに給料少ないので、生活ちょっとかつかつだなと思う』といった<余裕のない家計>、『精神的にも結構やられる感じもありました。いろいろ1人で全部やらなきゃいけないんで。もともと私も出た当初、お金があったわけじゃないんで、どんどん減ってく。でも、収入を得なきゃいけないっていうプレッシャーみたいなのがあって。結局、周りに相談できず、1人でずっと引きこもっちゃって、自暴自棄みたいな時期になっちゃって、貯金使っちゃうみたいなのがありましたね』と語られるような<金銭管理が困難>といった経済的な困難が語られた。

同時に、あらかじめ貯金に回したり、食費を切り詰めたりする<節約の工夫>を行い、なんとか生活している様子もあった。

2) 家計を圧迫する学費と目標のための貯蓄

また、『日本学生支援機構で貸与の利息、どっちも、全種類、借りてたんですよ。でも、その手続きがちょっとうまくいかなくて、今、ちょこちょこ返してる感じです』というように<学費の確保・奨学金の返済>が家計を圧迫していること、<目標のための貯蓄>を行っていることも語られ、生活をやりくりしながら、目標に向かっている様子がうかがえる。

3) 経済的な支援の必要性

<経済的な困りごとはない>という方や職場や配偶者の力を借りたくインフォーマルな経済的支援>を受けることで生活が成り立っている方もいる一方で、詐欺の被害にあったり消費者金融での<借金・自己破産>をし、<生活保護の利用>によって生活している語りも多く見られた。

(3) 就学の状況

【就学の状況】は、＜中途退学＞、＜進学・学業の断念＞、＜進学・学業の継続＞、＜進学をサポートやアドバイス＞＜特に困ったことはない＞の5つのコードで構成された。

カテゴリー	コード
就学の状況	中途退学
	進学・学業の断念
	進学・学業の継続
	進学をサポートやアドバイス
	特に困ったことはない

1) 中途退学、進学・学業の断念

＜中途退学＞では、高校や短大、大学の中退についての語りがあった。高校中退では、施設を出たい気持ちと出たくない気持ちとが『半々』のなかで退所したという内容があり、「中退＝退所」と理解がなされていることがうかがえた。中退のきっかけや経緯では、保育士になりたかったがお金に余裕がなく短大を辞めたというもの、『引っ越して1人暮らしして、その状態で家事をしてバイトをして、履修登録とか自分でやらないといけないみたいな状態に急になってしまって。心身ともに追いつかなくてダウンしてしまった』、通信高校に通っていたが『体力的に限界を迎えて倒れちゃって』という語りもあった。一方、高校中退後、自立援助ホームで高卒認定試験をとったという語りもみられた。

＜進学・学業の断念＞では、進学したかったものの親に反対されて就職した、大学でITなどを学びたかったがお金の管理や周りの人から勧めで就職した、料理の道に進みたかったが親から奨学金の連帯保証人にならないと言われた、福祉関係に興味があり大学に進学したくて高校を卒業したが大学には行かなかった、実家から費用を出すと申し出があったが何を要求されるかわからないと思ったので進学を諦め就職したなどの語りがあった。

進学・学業を続けたいという思いには、本人の夢ややりたいもの、進路に関する希望などが語られて、『ギリギリまで』悩んだという声もあった。本人の思いを受けとめたり応援する環境があると、異なる選択ができた可能性が示唆される。

2) 進学・学業の継続、進学をサポートやアドバイス

＜進学・学業の継続＞では、専門学校を卒業して資格を得たり、仕事に活かしているという内容がみられた。また、短大や四年制大学に進学できたという語りもあった。継続できている背景として、奨学金の給付・貸与、興味・関心のある学び、学校の寮での生活、入学や進路の相談などが語られており、＜進学後のサポートやアドバイス＞の大切さが分かる。

3) 特に困ったことはない

＜特に困ったことはない＞では、奨学金やアルバイトで大学生活を過ごしながらか卒業後の進路の見通しをもち『別にあんまり困ってることはない』というものがあつた。

(4) 就労の状況

【就労の状況】は、＜不安定な業種への就労＞、＜勤務形態・勤務時間の大変さ＞、＜仕事の適性やスキルへの不安・心配＞、＜労災・事故＞、＜税の手続き・社会保険の加入＞、＜働き続けられる勤務形態＞、＜やりたい・やりがいのある仕事＞、＜就職のサポートやアドバイス＞、＜職場の人間関係がよい＞、＜職場の人間関係が悪い＞、＜転職経験あり＞、＜転職経験なし＞、＜退職・休職＞、＜特に困ったことはない＞の14のコードで構成された。

カテゴリー	コード
就労の状況	不安定な業種への就労
	勤務形態・勤務時間の大変さ
	仕事の適性やスキルへの不安・心配
	労災・事故
	税の手続き・社会保険の加入
	働き続けられる勤務形態
	やりたい・やりがいのある仕事
	就職のサポートやアドバイス
	職場の人間関係がよい
	職場の人間関係が悪い
	転職経験あり
	転職経験なし
	退職・休職
	特に困ったことはない

1) 不安定な業種への就労、勤務形態・勤務時間の大変さ、仕事の適性やスキルへの不安・心配

＜不安定な業種への就労＞では、『アルバイトに就職、そのまま夜職に走ってしまって』、『夜のお仕事はきつかった』、『飲食店と、あと夜にちょっとバー』など、仕事内容のきつさや、かけもちで仕事をしている状況、働きながら通学している状況などがうかがえた。

それらの内容は、＜勤務形態・勤務時間の大変さ＞とも連動しており、残業が多いことや、勤務時間が長い割に給料が少ないこと、依頼された仕事を断ると回ってこなくなる、忙しい時はほぼ徹夜になるといった内容もみられた。

また、＜仕事の適性やスキルへの不安・心配＞では、就いた仕事が想像していたものと違って転職したというものや、店長になる目標があるが売り上げなど勉強中で難しいなどが語られていた。

2) 労災・事故

＜労災・事故＞では、コロナに罹患し休養した時の補償が職場から出なくなりお金がもらえなかった、仕事に膝をケガしたが労災と認めてもらえなかったという語りがみられた。

3) 税の手続き・社会保険への加入

＜税の手続き・社会保険への加入＞では、自営で収入を得ている中で、確定申告の大変さが語られていた。社会保険への加入については、本人の働く業種や勤務形態などにより保険加入の有無や、本人の理解・把握などについて、支援を考慮する必要があると示唆された。

4) 働き続けられる勤務形態、やりたい・やりがいのある仕事

＜働き続けられる勤務形態＞では、精神状態が不安定な時もシフトが無いので『何とか仕事できている』、『普通にデスクワークみたいな感じ』、『理解のある会社でお世話になっている』、『前よりはすごく休みやすくなったり、体調のことも相談しやすい職場』、『フリーランスみたいな』、『B型事業所のほうは結構自分の体調に合わせて来ていいよって感じなので。結構自由にやらせてもらっている』などがみられた。働き続けられる背景には、働き方が本人に合っていたり、職場の理解やサポートを得られやすいことがうかがえる。

また、＜やりたい・やりがいのある仕事＞では、自分の作品がYou Tube や記事としてネットに挙がってコメントをもらい『やっぱ一つ大きなモチベーションにはつながる』という語りがあった。保育士になりたいというきっかけから児童福祉に携わるなかで『やっぱりみんな心に傷を負ってる子が来るので、寄り添って話聞いたりとか、自分と似たような立場の子もいれば、全然違う、もっとひどい立場の子もいたりして、その子に寄り添うっていう力はすごく身に付いたかなと思いますね』という内容があった。

職場で任されるという経験や、興味がある仕事の内容、面白い・楽しいと思える経験、相手から感謝されたり認められる経験、お世話になった分恩返しできる仕事などの語りもみられた。

5) 就職のサポートやアドバイス

＜就職のサポートやアドバイス＞では、職場の社長と親が知り合いで就職につながったというものや、施設の職員が就職に向けてのお金を支援してくれたなどがあった。

6) 職場の人間関係がよい、職場の人間関係が悪い

職場の人間関係について、＜職場の人間関係がよい＞では、相談できる人がいる、仕事上で仲の良い人がいる、職場の雰囲気がい、社員さんが皆いい人、会社の社長に助けられるなどの語りがみられた。

また、＜職場の人間関係が悪い＞では、『新人いびりというか、ちょっとそういうのを受けていて』や、『上下関係というか結構叱られるっていうより威圧的』などがあり、転職を考えるきっかけの一つとなっていることがうかがえた。

7) 転職経験あり、転職経験なし

＜転職経験あり＞では、そのきっかけや背景として、『手取りが少なかったりとか、貯金もできない』、『自分のやりたいことを探すのに何個か転職』、鬱（うつ）状態で休職・退職を経て『これまで正社員だったのを現職からフルタイムパートっていう形でちょっと就業方法を変えて』、職場の人間関係が辛い、仕事内容が希望と違ってやりたい気持ち薄れた、周りに一か所にとどまって仕事をしている人がいなかったなどの語りがあった。転職の背景には、収入の低さ、人間関係の問題・ストレス、心身の不調、やりたかったことと実際の仕事内容の不一致などが読み取れる。

＜転職経験なし＞では、高校を卒業し施設等を退所した後に、最初に就いた就職先からの変更がないというものであった。3年間継続している人は『会社辞めようかなとも思ったりもするんですけど、やっぱり今、今の社長に助けられてる部分はあるんで続けてるって感じですかね』と語る。また、2年間継続している人は、社員寮で『仕事が休みの日も割と社食でご飯』を食べることができ、会社の

積み立てで貯金をされていた。転職経験がない背景として、衣食住や収入の安定、職場からの人的・物理的なサポートがあることが示唆された。

8) 退職・休職

＜退職・休職＞では、退職・休職のきっかけや経緯に関する語りがみられた。具体的には、結婚や出産を機に退職のほか、職場のハラハラから精神的に不調となり最終的に退職、一人暮らしで仕事と勉強と家事が重なり『早い段階で挫折』、先天性の持病があり身体を壊して入院を機に退職、寮付きの職場で働くことになったが身体がついていかずに退職、コロナ禍で給料も大変ななか体調を崩して退職などである。体を壊して退職後『打ち切りになっていた生活保護をまた再開し、ちょっと今はセーブしつつ、理解のある会社でお世話になっているような感じ』という語りもみられた。

また、『やりたい仕事とかなくて。もうずっと“学生”の時からほんとにやりたいことがなくて。楽しめる仕事ないのかなみたいな。自分で探してもあんまり見つからない』といった、仕事へのやりがいや、したいことを見出しにくいという語りもあった。

9) 特に困ったことはない

＜特に困ったことはない＞では、『職場で結構面倒見てもらえてるので、あまり困ってることはない』、『何とか生活できてるかな』などがみられた。『特にはない』としながらも、『改善したいことといえば、通勤時間』という語りや、施設等を退所して就職した頃は心配や不安があったが『普通に仕事やってるうちに、何かそういう不安とかっていうのがなくなってたっていうんですかね、どちらかというと』という不安や心配の軽減に関する語りもみられた。

これらの語りの背景をみると、仕事は大変だがやりがいがある、職場の雰囲気がい、面倒をみてもらっている、相談できるという内容があった。職場のサポートを得ていることがうかがえる。

(5) 心身の健康状態

【心身の健康状態】は、＜ストレス・心理的な不調＞、＜孤独感・落ち込み＞、＜自傷・希死念慮＞、＜慢性的な疾患＞、＜障害・難病＞、＜身体の不調・しんどさ＞、＜感染症＞、＜医療機関へのアクセス(利用・相談)＞、＜不調時の相談(医療機関以外)＞、＜健康保険証がない＞、＜健康を維持する工夫＞、＜健康・健康上の困りごとなし＞の12のコードで構成された。

カテゴリー	コード
心身の健康状態	ストレス・心理的な不調
	孤独感・落ち込み
	自傷・希死念慮
	慢性的な疾患
	障害・難病
	身体の不調・しんどさ
	感染症
	医療機関へのアクセス(利用・相談)
	不調時の相談(医療機関以外)
	健康保険証がない
	健康を維持する工夫
	健康上の困りごとなし

1) ストレス・心理的な不調、孤独感・落ち込み、自傷・希死念慮

＜ストレス・心理的な不調＞では、『隣の部屋の人の叫び声』で睡眠不足が続いている、『気持ち的には鬱(うつ)な日もあるんですけど、元気な日もあるしみたいな』、『いろいろ全部やらなきゃいけない』、『パワハラというか』でバイトが怖くなった、『フラッシュバックは波もある』、『いらいらするとすぐ太りやすくなってしまう』、『普通に日常生活を送れるぐらいに、外出られるようになればいいかな』など、対人関係でのストレスや、外出の怖さ、過去の経験のフラッシュバックに苦しむことがあるという語りがみられた。

また、＜孤独感・落ち込み＞では、周りに頼る人がいない、相談できない、さみしいけれどどうしてよいかわからない、といった内容とともに語られていた。『さみしさをこじらせてしまって。SNS で出会い系みたいなあるじゃないですか。ああいうので、もう誰だかも分かんない人と連絡取ることになってしまった時があって。それが結構、それでも痛い目を見てしまって。でも大学受験終わって、1人暮らしぐらいの段階で、親以外の大人、親だったりとか先生とか、市とか県とか、公的機関以外の大人との付き合い方がなんにも分からないまま SNS とかを始めてしまって。それも最善の選択ではなかったことは分かるんですけど、どうしたらいいのかは分かんなかったですね。その時に甘えられる人がいなかったのが、結構つらかったです』という語りには、施設等を退所後に、本人が社会のなかでのつながりを見出せないなかで SNS しかなかったという苦しさを読み取れる。

＜自傷・希死念慮＞では、『浮き沈みが激しい』、『自殺未遂みたいなことしちゃって、病院に入院してたり』、『夜中にちょっと死に方を調べてみたり』など、＜心身の不調＞や＜孤独感・落ち込み＞のなかで『マイナス思考になっちゃって』おり、鬱(うつ)などの精神的なつらさや、虐待を受けたフラッシュバックなども語られていた。『もっと緩やかでいいので無くしていけたら』という願いもみられた。『結構、自傷癖がある』と語った人は、住まい、お金(生活費、学費、借金等)、原家族・親戚との関係、職場の人間関係、孤独感などを抱えて『沈む』という。また、親に似ている雰囲気の人に会おうと『涙が止まらなくなっちゃって』という人は、そのことで誰かに連絡したり相談したりすることはないと語っていた。食事やお風呂に入るなど家のことができないつらい状況の時に、パートナーがそばにいて支えてくれることでなんとかやれているという語りもみられた。

2) 慢性的な疾患、障害・難病、身体の不調・しんどさ、感染症

＜慢性的な疾患＞では、腰痛、頭痛、月経(生理)に関するつらさや困難についての語りがあった。

また、＜障害・難病＞では、双極性障害、適応性障害、複雑性 PTSD、腫瘍、先天性の持病、先天性の難病等がみられた。医療機関での受診や検査を受けている旨の語りもあった。

＜身体の不調・しんどさ＞では、施設等退所後に『いろいろ病気が見つかって』や、『仕事で働き始めた頃がちょうどコロナ禍』で体調を崩したことにより退職したというものがあつた。

＜感染症＞では、インフルエンザやコロナに感染した時のつらさが語られ、仕事を休むことができた、病院を探して行ったというもののほか、保険証が無くて困ったというものがあつた。

3) 医療機関へのアクセス(利用・相談)、不調時の相談(医療機関以外)

＜医療機関へのアクセス(利用・相談)＞では、身体的な不調時の病院の利用や、歯科への通院、

精神科への通院・相談などがみられた。治療代などお金がかかることで『来月でいいかなっていうふうに後回ししちゃう』、『給料来るまで待たないといけない』というものや、一人での通院が『心細い』、『行きづらい』というものもあった。また、治療や服薬によって体調が『どんどん良くなっていた』という語りもみられた。パートナーの支えで通院できているという語りもあった。

＜不調時の相談(医療機関以外)＞では、以前入所していた施設職員に電話などで相談する、アフターケア事業所Zに相談するというものがあった。

4) 健康保険証がない

＜健康保険証がない＞では、親に保険証を取られていたため、インフルエンザやコロナなどに罹患した時に困ったという語りがあった。

5) 健康を維持する工夫

＜健康を維持する工夫＞では、心身の不調を自覚しつつ『食事とか気を付けたりとか、睡眠時間ちゃんと取るようにするとか、そういう基本的なことをして改善していけばいい』や、『自分でこうしたらいいなっていうのがなんとなく分かってきた』といった内容がみられた。また、『ジムに行くべく行くようにしている』があった。

6) 健康・健康上の困りごとなし

＜健康・健康上の困りごとなし＞では、『特に重い病気にかかったことはない』、『健康面での不安や心配はない』、『健康』、『大丈夫』、『変わりはない』などがみられた。

(6) 里親・施設とのつながり

【里親・施設とのつながり】は、＜継続的なつながり＞、＜何かあった時の支援・関わり＞、＜困っている話はしない＞、＜心配をかけたくない＞、＜必要性を感じない＞、＜つながりがいい＞、＜頼りたい・つながっていたい＞の7つのコードで構成された。

カテゴリー	コード
里親・施設とのつながり	継続的なつながり
	何かあった時の支援・関わり
	困っている話はしない
	心配をかけたくない
	必要性を感じない
	つながりがいい
	頼りたい・つながっていたい

1) 継続的なつながり、何かあった時の支援・関わり

つながりがあるという内容を示すコードには＜継続的なつながり＞、＜何かあった時の支援・関わり＞があった。

＜継続的なつながり＞では、頻度は、1週間に一度、月1回、年1～2回、定期的など様々であった。『連絡したい時できるのは楽かな』、『信頼しているししゃべって』、『すごい自分のことを気にかけてくれたり』、『助けてくれる』、『ちょうどよいくらいのありがたい距離感』などがあつた。

次に＜何かあった時の支援・つながり＞では、お金(お金がない、借金、お金の管理、学費・奨学金、手取り収入が少ない、生活保護等)、心身の健康(病院に行く等)、仕事(仕事に行けない等)、住居(アパート探し等)、家族との関わり(家族関係の問題等)など、困った時の相談や支援に関する語りがみられた。

また、『たまに何かあったら飯誘って、ちょっと近況を話し合う』、『何かあったら連絡取る』、『誕生日とか、成人式の時とかは連絡が来ました』など、困っているかどうかにかかわらず「何かあった時」に連絡をとるという内容や、誕生日や成人式などのお祝いや記念日に連絡があるという語りもあった。

これらの語りからは、施設や里親を離れた後も、気軽に話すことができたり、見守ってくれる存在の大切さが示唆される。

2) 困っている話はしない、心配をかけたくない

＜困っている話はしない＞では、困っていることは職員ではなく『友達とか』に話すというものや、『報告とかはするんですけど、相談まではいかない』、『性格的に相談するのがあまり得意じゃない』、『怒られそうでできない』などがあつた。

また、＜心配をかけたくない＞では、『いろいろやってもらっているのだからこれ以上負担かけたくない』といった職員に負担や迷惑をかけたくないという語りがあつた。

たわいのない話をするが、遠慮や申し訳なさ、相談が苦手などから、相談しない、相談しにくいという思いが読み取れる。

3) 必要性を感じない

＜必要性を感じない＞では、友人など他に相談する人がいるというものや、用が無いので自分からは連絡しない、里親や施設と仲たがいをしして連絡の手段を断ち切ったという語りがみられた。

4) つながりがない

＜つながりがない＞では、『最近は全然話してないですね』や、『話そうと思えば話せますけど、今自分がちゃんとやってることが、なんかそれが一番なのかな』など、現状はLINEや電話、訪問等でのつながりがないという語りがあつた。

一方で、『忙しそうにしてたんで』、『今日連絡しなきゃよかったなって思っちゃうのが嫌だ』など、施設職員や里親が忙しそうにしているのを感じ取り、連絡への遠慮や躊躇があることもうかがえた。

5) 頼りたい・つながっていたい

＜頼りたい・つながっていたい＞では、『頼れる大人の人が欲しい』、『施設の担当の職員さんに相談とかしたい』のほか、『施設職員と退所した子どもが個人的な連絡を取り合ってははいけませんよ』という不文律があるので、そういうつながりっていうのはあまり持ててない』という語りがあつた。

職員に話したい、相談したいという思いが、阻まれたり、諦めに転じている可能性が示唆される。

(7) 原家族とのつながり

【原家族とのつながり】は、＜原家族との軋轢＞、＜直接連絡をとらない＞、＜ケアが必要な原家族の存在＞、＜原家族に頼れない＞、＜原家族とのつながり・サポートがある(あった)＞、＜家庭復帰・家庭引き取りの経緯＞の6つのコードで構成された。

カテゴリー	コード
原家族とのつながり	原家族との軋轢
	直接連絡をとらない
	ケアが必要な原家族の存在
	原家族に頼れない
	原家族とのつながり・サポートがある(あった)
	家庭復帰・家庭引き取りの経緯

1) 原家族との軋轢、直接連絡をとらない

＜原家族との軋轢＞では、施設退所後に『生活費的な感じ』で親に7万円ほど渡していて揉めた、進学するように言われていたのに『いきなり、おまえ就職しろよ』となり就職する流れになった、奨学金の相談をしたときに『連帯保証人にはならない』と言われた、保険証を取られてしまった、母親が『精神的に安定してない』などがみられた。兄弟姉妹や祖父母との関係の悪さについての語りもあった。やりたいことや進学などを親から否定され、『やっぱ親には応援してほしい』という切実な声もあった。

また、＜直接連絡をとらない＞では、施設等にいた頃に親から届いた『手紙を読んだ時点でもうちよっと無理かもって思っちゃって』現在も連絡をとっていない、施設等の職員を通して『最近お母さんどう?』と親の近況を知る、アフターケア事業所Zのサポートを得て住所や連絡先などを親に伝えないようにしているなどの語りがみられた。

2) ケアが必要な原家族の存在、原家族に頼れない

＜ケアが必要な原家族の存在＞では、兄弟姉妹の『サポートをするために戻ってきたっていうのも理由の一つで、子どもの面倒を見たりとかっていうのがいろいろあったので、ちょっと支出がすごかった時期があって』や、親が妊娠していて情緒的にも不安定な状況にあったなど、日常生活のサポートや精神面のケアを行っていることがうかがえた。そのような状況のなかで、『自分の時間がつくれなかった』という語りもみられた。

また、＜原家族に頼れない＞では、『施設出てからも家の中結構ごたごたしてた』や、兄弟姉妹の大変な状況をみているなかで『頼るとかが間違いじゃないか』と感じていた、親が不在で『ほとんど一人暮らしみたいな状態』などがあった。

3) 原家族とのつながり・サポートがある(あった)、家庭復帰・家庭引き取りの経緯

＜原家族とのつながりサポートがある(あった)＞では、親や兄弟姉妹に相談したり、助けってもらった経験に関する語りがあった。具体的には、生活保護の手続きに関する相談、就職先の紹介、子育ての相談、学費を出してくれたなどである。親とは関わりをもたないが兄弟姉妹とはつながっているといった家族の一部とつながりがあるという語りもあった。また、育ててくれたことに関する親への感謝の思いもみられた。

＜家庭復帰・家庭引き取りの経緯＞では、親から『戻っておいでよ』と話があり、施設職員と相談して『最終判断は自分』で戻ったというものや、親が夜逃げをしまい辛うじて持っていた祖父母の連絡先メモを頼りに祖父母宅に引き取ってもらったという語りがみられた。いずれも、施設等を退所後にいったん原家族と同居後、現在は一人暮らしとなっている。

(8) 新しい家族とのつながり

【新しい家族とのつながり】は、〈結婚〉、〈パートナー・新しい家族の存在〉、〈出産の経験〉、〈子育てを支援してくれる家族・里親の存在〉、〈子育てへの不安〉の5つのコードで構成された。

カテゴリー	コード
新しい家族とのつながり	結婚
	パートナー・新しい家族の存在
	出産の経験
	子育てを支援してくれる家族・里親の存在
	子育てへの不安

1) 結婚、パートナー・新しい家族の存在、出産の経験

〈結婚〉について、全体として多くはないが、結婚をしている人もいる。措置解除後に一人で生活していたが、『妊娠して、結婚した』というように妊娠を契機として結婚をして、家族を形成している語りがみられた。

〈パートナー・新しい家族の存在〉では、『ご飯を一緒に食べてくれたりだとか、家事も私ができない分をやってくれたりとか、そういうのでだいぶ救われてるというか。生活として彼がいてくれるから成り立ってるみたいな面はかなり大きい』というようにパートナーがいることで、生活が形成されていることが感謝とともに語られていた。また、『いろんな経験をしてきた中で、他人に心を開きづらいというのもあって、お互いほんとに信頼しきっている状態なので、自分が全部話しちゃうんですけど、何かあったら相談できるような人』『もういるだけで全然違うというか、安心はできます』というように、生活面だけではなく、精神的な支えとなっていることも語られていた。

〈出産の経験〉も全体としては少ないが、3名いた。

2) 子育てを支援してくれる家族・里親の存在、子育てへの不安

〈子育てを支援してくれる家族・里親の存在〉では、夫の実家が遠方ではあるが、『たまに会いに来てくれたり。あと、お正月とお盆に、いつも実家に行って、泊まったりしてます』というように、良好な関係が語られていた。

〈子育てへの不安〉では、『旦那のお母さんがもう他界していて、おうちにいないので、近くに育児について気軽に相談できる方がいなくて、ちょっと困った時にさっと聞ける人がいないというのがちょっと』と語られ、身近な相談相手おらず不安を抱えていることがうかがえた。

他に、現在は子どもはいないものの、子ども時代の経験から、『圧力を掛けて子供の言うことを全て否定するっていうのをやってしまうんじゃないかとか、子供が嫌がることをどうしてもしてしまうんじゃないか、自分が思ってきたこと、今までここの親に対しての思ってきたことをそれをやってしまうんじゃないかっていうのはちょっとどうしても考えてしまって出産とか妊娠とかすごい怖くなってしまったりとか』という子ども時代の逆境的体験から子どもを持つことへの不安が語られて

いた。

(9) 他人とのつながり

【他人とのつながり】は、〈アフターケア事業所Zによる支援〉、〈相談できる人がいる〉、〈相談できる人がいない〉、〈職場・学校での親身な存在〉、〈里親・施設で育った人との交流〉の5つのコードで構成された。

カテゴリー	コード
他人とのつながり	アフターケア事業所Zによる支援
	相談できる人がいる
	相談できる人がいない
	職場・学校での親身な存在
	里親・施設で育った人との交流

1) アフターケア事業所Zによる支援

〈アフターケア事業所Zによる支援〉では、本インタビュー調査のコーディネートをアフターケア事業所が担当していることもあるが、サポートへの感謝が多数の方から語られていた。『自分をお願いをして、例えば食料品を送っていただいて』というように日常生活物資のサポート、病気や困りごとがあった時に連絡をして、『サポートしてくれる機関同士の何か連携みたいな』というように機関連携や行政手続きへの支援も語られ、多様な形での支援とそれへの感謝の言葉がみられた。また、『昼ご飯のレパトリーの話とか』等、日常的な相談ニーズも語られた。このほか、具体的なニーズというよりは、『気に掛けてくださってるっていうのはすごく感じる』といった事業所があることでの安心感も語られていた。

2) 相談できる人がいる、相談できる人がいない

〈相談できる人がいる〉では、『親友がいるんで』、『友達が一番言いやすい』友人に相談していることが語られていた。また、『労働条件の問題とかが、僕のちょっと理解があんまり追いつかないところとかは相談してみて、こういうことだよっていうののアドバイスは、もらうことはありますね』と弁護士をあげる人もいた。『「1日お米、2合から3合ぐらい食べるんですよ」って話をしたら、お米くださったり』というように食料品を支援してくれる人がいることも語られていた。

〈相談できる人がいない〉では、『高校卒業したと同時に友達との連絡先とかも全部消して』、『言ったところでどうせ何も変わらないだろうなって』という語りがあり、相談することへの諦念がみられた。

3) 職場・学校での親身な存在、里親・施設で育った人との交流

〈職場・学校での親身な存在〉では、学校や職場において継続的な人間関係や信頼できる他者の存在が、孤立感を和らげる役割を果たしていたことがうかがえる。『小学校から専門までずっと一緒に、ほぼ、本当に幼なじみ』という関係のある友人の存在や『今の社長に助けられてる部分はあるんで続けてる』と職場における理解ある上司の存在が、就労の継続や安定につながっている様子が語られている。

さらに、『友達は仲いいですね。ずっと中学、高校から仲いい子が、多くはないですけど、何人か

いて。そこはずっとつながってます』との語りもあり、人数は限られていても深いつながりを持ち続けている人間関係がうかがえる。

〈里親・施設で育った人との交流〉では、社会的養護を必要とするという背景を持つ人とのつながりについても複数の語りがみられた。『やっぱほんとに話が合うし、何でも話せる感じがして、すごい居心地がいいです』、『もう単純に遊んだりとかっていいことしかないですね。あんまり相談したことはないですかね』と語るように、必ずしも支援的・相談的な関係でなくても、安心して過ごせる仲間としてのつながりがあることが語られた。

他には、『闇の部分すごい気が合うというか。お互いになんでうまくいかない人生なんだろうなって、難しいねって』との社会的養護を必要とする背景に共感する側面もみられた。

一方で、施設退所後には『連絡を取らない』というルールを貸して関係性の維持を制約していたり、逆に『性風俗業のあっせんをされちゃうっていうリスクが多い』という理由から自ら関係性を絶っている語りもみられた。

(10) 今目標としていること

【今目標にしていること】は、〈希望する就学の実現〉、〈希望する就職の実現〉、〈自動車・バイクの運転免許取得〉、〈自動車・バイクの運転免許取得〉、〈ゆとりのある生活〉、〈安定した生活〉、〈貯金したい〉、〈普通・平穩に暮らしたい〉、〈新しい家族への想い〉の10つのコードで構成された。

カテゴリー	コード
今目標にしていること	希望する就学の実現
	希望する就職の実現
	仕事のスキルアップ
	自動車・バイクの運転免許取得
	関心のある活動への取組
	ゆとりのある生活
	安定した生活
	貯金したい
	普通・平穩に暮らしたい
	新しい家族への想い

1) 希望する就学の実現、希望する就職の実現、仕事のスキルアップ

〈希望する就学の実現〉では、現在の仕事に関連して『福祉関係にやっぱ興味があるので、そっち系の勉強はしてみたい』というように大学等進学に関する語りがみられた。その一方で、進学の希望はあるものの、金銭的な不足からすぐに実現することの難しさも語られた。『図書館の司書さんになりたいんですけど、やっぱり大学費用とかを考えると、もう一段落してお金またためてからっていうふうになってきちゃう』、『今働きたいという思いは、学校に行くための資金を集めるため。やりたい仕事は専門学校に行かないとかなわない』、『(※看護師になるための学校に行きたいが) 2-3 年をめどにお金をためつつ、3 年後くらいには受験したいなあと思う』。他にも、『ずっと保育士やりたかったんですけど、保育士の短大とか、やっぱめっちゃお金かかるし、めっちゃ勉強とかしながらバイトするのは、何か自分きついかないかと思って、いったん美容行っただですよ』という語りがあり、学生生活とアルバイトの両立の不安から、希望する進路ではない進学を選んだ方もいた。

〈希望する就職の実現〉、〈仕事のスキルアップ〉では、『自分の店をやりたい』、『音楽の仕事が結

構、楽しくて。依頼の数を増やす』『自分が独立して自分がそのトップに立ってちょっとやってくことを、仕事としてはやっていきたい』自分のスキルアップや現在の仕事をさらに拡充していきたいという前向きな語りもみられた。その一方で、自身の病気や精神状態から、『自分の状態に関してちょっと理解ある職場に就きたい』というように自分の状況に合わせた就職の希望も語られていた。また、『ちょっとしんど過ぎて、仕事が。結構、メンタル面でも仕事面でも、つらい仕事ですね。(中略) 今、勉強してるんですけど、結構、難しくて、自分で精いっぱいになっちゃってるんで大丈夫かなみたいな。目標としては、店長になるんですけど』というように困難な状況に直面しながらも、自身の目標を模索し、それを支えに働き続けている様子が見えた。

2) 自動車・バイクの運転免許取得、関心のある活動への取組

〈自動車・バイクの運転免許取得〉では、仕事や趣味における行動範囲を広げるために免許取得を希望する語りが複数みられた。

〈関心のある活動への取組〉では、自らの経験を活かし、学生などに語る活動を行っている方のかにも、『施設を出る子どもたちに一着オーダースーツをプレゼントしてあげたい』『シェルターを造りたい』『子ども食堂か里親か、家でできたらいいな』といったように、社会的養護を必要とした自身の背景に根ざした活動をすでに実践している人や、今後の実現を目指している人の存在が確認された。

3) ゆとりのある生活、安定した生活、貯金したい、普通・平穩に暮らしたい

〈ゆとりのある生活〉では、『家を欲しいかなとは思いますが』『願わくば家建てたいですね』『やっぱりお金持ちになりたい』という語りが見られた。

〈安定した生活〉では、『正社員になりたい』『今の職場がマックス5年しかいれない(中略)今の職場を続けていきたい』という安定した雇用条件で働くことへの希望が語られた。また、『今、就労のB型に通っているんで、ちゃんと毎日継続して通うことと、体調を整えて、将来的には病院とか行かずに、生活保護とかも抜けられたらいいなと思っています』といった語りからは、日々の安定を積み重ねることが将来的な自立につながるという意識も見えた。

〈貯金したい〉では、『貯金を月に1万はしたいな、まず1万』『(※夫と子と暮らす家を建てるために)頑張って貯金してます』という語りも見られた。

〈普通・平穩に暮らしたい〉では、『普通になりたい』『もう平穩に暮らしたいですね。仕事とか取りあえずやりたいことは置いて、生活面では普通に何も困らずに過ごしたい』『夢がないんですよね、やりたいこととか。(中略)生きてれば何とでもなるんで、死なない程度に生きたい』という語りが見られた。『普通になりたい』『平穩に暮らしたい』という言葉には、不遇な背景や積み重ねられたしんどさが示唆され、特別な成功や目標よりも、安定した日常生活を送ることへの切実な願いが見えた。

4) 新しい家族への想い

〈新しい家族への想い〉では、将来において自らが新たな家族を築くことへの想いが語られた。ある方は、『僕は家族がほしい。ただそれだけです。(中略)自分が家族っていうものを、あんまり体感

してこなかったんで。次は自分みたいにならないようにしようっていう思いは結構強いと思います』と語っており、過去を踏まえて、次の世代には同じ思いをさせたくないということが語られていた。また、『自分はこういう経験したんで。もっと家族の時間に寄り添おうとか、そういうのを思うようになりました。僕は。僕は寂しかったんで、小っちゃい頃は』との語りからも、自らの経験を起点に、これから築く家族との関係性を大切にしたいという気持ちがうかがえる。さらに、『子どもができればお金が幾らかかるっていうか、生まれるだけでも幾らかかるかとかっていうのあるじゃないですか。そういうのは調べれば幾らでも出てくると思うんですけど、把握して、ちゃんと貯金というかお金に余裕が持てるように、そのために仕事頑張ろうって感じです』といった語りもあり、将来の生活を具体的に見据えながら、自らの人生を主体的に築こうとする姿がみられた。

(11) 里親・施設でのポジティブな経験

【里親・施設でのポジティブな経験】は、15コードで構成された。全体としては、まず、安全・安心が確保された状態であることを基盤として、里親や施設職員との関係性のなかで、守られるだけでなく、子ども自身の思いや葛藤を受け止めてもらえたと感じられた経験が重要なものとなっていた。加えて、家事・炊事、金銭管理といった社会生活を営む上で必要となる生活スキルを学んだことについても、現在の生活に活かされているという実感から前向きな経験として語られていた。

カテゴリー	コード
里親・施設でのポジティブな経験	安全で安心できる環境での生活
	信頼できる里親・職員との出会い
	家庭的な環境での生活
	里親・職員の親身な対応
	季節行事やイベント等の体験
	他の子どもとのかかわり
	多様な境遇の人との出会い
	多様な人とのコミュニケーション
	家事・炊事などの生活経験
	金銭管理の考え方を教わった
	公的機関での手続きの仕方を教わった
	退所後の社会資源の紹介
	性教育
	やりたいことや夢を見つけた
	進路・将来のための相談支援

1) 安全で安心できる環境での生活、信頼できる里親・職員との出会い

具体的には、子どもが社会的養護のもとで暮らすうえでの基盤となるものとして、＜安全で安心できる環境での生活＞や＜信頼できる里親・職員との出会い＞があった。

まず、社会的養護のもとで暮らす以前は、『大人から暴言とか手足出てこないほうが。結構、実家にいる時ほぼ毎日、暴言、DVか、されてたんで。』といった生命が脅かされるような環境で生活していたために、施設等での生活はそのような危険性がないという意味で『安心で安全できる環境』となっていた。また、『職員さんの様子は、全然普通に話せるあったかい感じ。』というように、安心で安全な環境であるということを、職員との関係から感じているという様子もみられた。

2) 家庭的な環境での生活

＜家庭的な環境での生活＞については、『普通の考え方、普通の生活、あとは、私がお世話になった里親さんが、実子の方がいらっしやったのもあって、普通の家族の在り方みたいなのも学べたというか間近で見られて。普通、こういうふうにご過ごしててもいいんだっていう、変な自分ルールっていうか、縛りみたいなものを払拭できたのが、ものすごい大きかったですね。』というように、『普通の考え方、普通の生活、普通の家族のあり方』を知ることができたという経験がポジティブなものとして捉えられている。

3) 里親・職員の親身な対応

＜里親・職員の親身な対応＞は、施設等での生活を前向きに捉えるための鍵となっている。自分の気持ちに寄り添ってくれたことについて、『まず優しくかったのと、こっち側の気持ちにちゃんと寄り添ってくれてたところですかね。こちら側からもこういうとかしたいとか（中略）一回寄り添ってくれるからこちらとしては納得もしやすかったし。ちゃんと会話ができてるっていうか、そういう感じだったのが良かったのかな』というように、『ちゃんと会話ができています』ことが良かったと語られている。

また、『ほんとに完全に反抗期で、すごいひどいことも言ったのに、ほんとに気に掛けてくれてたなって（中略）私がある特定の職員にすごい反抗的な態度を取って、後悔してるっていう話を聞いてくれる職員とか。怒られた後に、『まあそういうことあるよね』って慰めてくれる職員とかがいた』というように、ひどいことを言った自分も後悔している自分も、受け止めて慰めてくれたという経験が、職員の親身な対応として心に残っているという。さらに、職員等が『周りにもっと相談していい』と気づかせてくれたという語りや、そのためには『何何気ないコミュニケーションが大事』であったという意見もみられた。

4) 季節行事やイベント等の体験

加えて、＜季節行事やイベント等の体験＞は、温かな思い出として残っているだけでなく、現在の生活のなかでもその体験をもとに他者との関係を構築することに活かされているという語りがみられた。誕生日やクリスマスのプレゼントがうれしかったという語りのほか、『何か夏行事みたいなのがあって、みんなでどこか行きたいところを選んで、自分が行きたいところを選んで、みんなで行くっていうのがあるんですけど。やっぱりその施設でしか行けないメンバーで、ちょっと遠出とかするの、やっぱりそれは楽しかった』、『結構、実家にいる時が何もしたくないみたいな感じだったんで。知らないものいっぱい見れたし、やったことないようなことを経験できたし。いて気分は良かったです。』、というように、行きたいところを選び、みんなで行って、それを自分が大人になったときにも子どもにしてあげたいという気持ちが語られていた。

5) 他の子どもとのかかわり、多様な境遇の人との出会い、多様な人とのコミュニケーション

次に、社会的養護のもとで経験する＜他の子どもとのかかわり＞＜多様な境遇の人との出会い＞＜多様な人とのコミュニケーション＞は、子どもの視野を広げる契機となっておりと同時に、我慢や忍耐強さといった集団生活や共同生活であるために身につけざるを得なかったものも含まれている。

まず、『一緒にいる子たちが、みんなめっちゃ仲良くて（中略）いつも外で遊んだりとかしてたんで。人間関係に困ったことは全然ないです。』というように、他の子どもとの関わりが楽しい思い出として残っているという語りがみられた。また、『相談できる相手がすぐ横にいるっていうのはでかいと思います。私的には、養護施設のほうが、いろんな年齢の子とも関われるし、近くに人がいるって安心感と、常に楽しいこともあれば、悪いこともいっぱい見えるので、いろいろ得られるものが大きいのは児童養護施設かなって思います』のように、相談できる相手がすぐ横にいて、いろんな年齢の子どもとかかわることができたことがポジティブな経験となっている。

加えて、『生き方っていうかこういう人たちもいるんだみたいのを多分、他の人より知ってると思います。』『自立援助ホームって、たぶん基本的に共同生活になるので、生活していく中で不満に思ったこととかがあっても、いったん飲み込んで自分の中で整理をつけてっていうことはできるようになったかなと思ってます。』というように、多様な人とかかわらざるを得ない環境に身をおいていたからこそ、人とうまく付き合う方法や、コミュニケーションの取り方、不満を自分の中で整理していくといった方法を身につけたという語りがみられた。

6) 家事・炊事などの生活経験、金銭管理の考え方を教わった

また、＜家事・炊事などの生活経験＞＜金銭管理の考え方を教わった＞は、退所後の生活スキルとして現在の生活で役に立っているため、ポジティブな経験として捉えられている。まず、『掃除だったり洗濯だったりとかっていうのは、高校生になったら自分でやってねみたいところはあったので、そういうところを自分でできるようにしてもらえたっていうのは、すごく良かったのかなって思います。』のように、高校生になった時点で掃除や洗濯の経験をしたことが良かったという意見があった。また、『お金についての一般常識に近いこと、常識的な部分を、いろいろお金のこと以外のこともなんですけど、教えてくださったのが、だいぶありがたかったですね。』というように、金銭管理の考え方、方法について、『常識的な部分』を教えてもらったことがありがたかったという

7) 公的機関での手続きの仕方を教わった、退所後の社会資源の紹介

＜公的機関での手続きの仕方を教わった＞＜退所後の社会資源の紹介＞については、『施設にいた職員の人とハローワーク行ってパネルとかの操作の仕方とか教えてもらって、あん時ってこうやってやってたよなみたいなの』『住民票の作り方とか、戸籍の抜き方とか、いろいろ。』のように、施設職員等と一緒に公的機関等に出向いて行った経験がその後の社会生活を送るうえで役立てられていることが語られた。

8) 性教育

さらに、＜性教育＞は『性学習っていう時間があって、性に関することを職員の先生が、お話ししたりするのが、たまにあります。』という経験が語られ、社会的養護のもとでの生活においてのみならず、リスクを回避するためにも重要なものであるととらえられていた。

9) やりたいことや夢を見つけた

将来に向けて自己実現につながる＜やりたいことや夢を見つけた＞については、『まず自分がその

ままお母さんの所で生活していたら、このような自分の夢とかがかなえられなかったと思うので、14年、15年、本当に人生の大半を施設で過ごさせてもらったのは、言っちゃえば宝物というか、なんか施設でしか経験できないことをさせてもらったので、その面は本当に感謝してもし切れない』というように、社会的養護のもとにいたからこそ、自分の夢をかなえることができたという語りがあった。

また、『施設内ではあるんですけどC県の施設で1番だったとかっていうのも、ちょっと自信になると思いますし。自分の得意なことを見つける機会にもなるし。また次はあれやってみたいっていきかけにもなるんで。』というように、施設での生活のなかで得意なことを見つけることができ、それが自信になったという。さらに、『保護所の中めっちゃくちゃきつかったんですけど、何もやることなく。でも音楽は聴けたから、めっちゃそれで助かって。で、援助ホーム来て、もう一回自分の好きなジャンルをずっと聴いてたら、俺も与えられる側になれたらなっていう感じで始めました。』のように、自分がもともと好きだったことを一時保護されたときとその後の自立援助ホームでの生活でも継続し、将来の夢につながったという語りもみられた。

10)進路・将来のための相談支援

上記のことと関連して、＜進路・将来のための相談支援＞については、大学進学のための奨学金の情報を伝えてもらい、『頑張れば行けなくないよみたいな、選択肢を結構増やしてくれたので、それがすごい良かったです。』という語りがみられる一方で、『施設の職員の先生と進路担当の先生と、あとはちょっと周りの友達と、あと学校にあった進路資料とかを見て、大体の大学費用っていうのを、大体これくらいかなっていうのを出して（中略）じゃあ就職したほうがいいよねっていう結論になりました。』というように、退所後の現実的な生活を見据えたうえで、進学を断念するという結論になったという語りもみられた。

（12）里親・施設でのネガティブな経験

【里親・施設でのネガティブな経験】は、13のコードで構成された。全体としては、施設等のさまざまな制約に関することと、子どもとしての基本的なニーズが満たされにくいことに大別され、さらには子どもの安心・安全が脅かされるリスクとなりうるようなものがみられた。

カテゴリー	コード
里親・施設でのネガティブな経験	ルール・規則
	集団生活ゆえの制約
	コロナの影響による制約
	経済的な制約
	学習・進学機会の制約
	生活環境の不公平感
	里親・職員の対応
	コミュニケーションが希薄
	一般家庭のような生活経験の不足
	甘えられない環境
	他の子どもとの関係性
	里親の実子との対応の差
	性的な問題

1) ルール・規則

ネガティブな経験としての<ルール・規則>についてはインタビュー協力者のおよそ半数が語っていた。まず、一時保護所については外出ができなかったことをはじめ、『個別部屋みたいなところだとトイレとお風呂以外、本当に出ないので1週間外にも出ず。』というような語りのほかにも、かなり制約が厳しい状況がみられた。また、施設等においても、門限、小遣い、友達の家に行くこと、就寝時間についての規則がネガティブに語られていた。施設等のルール・規則については、子ども自身も一定の理解はしているものの、生活するうえでは、施設等で生活していない友達等との関係を構築するうえでの障壁となっている可能性がある。より影響が大きいものとしては、施設全体で子どものスマホ使用が禁止されていたケースでは、『結構きつかったんですけど。やっぱり授業とかでも、みんな持っているのが当たり前だから、授業とかでもスマホの調べ学習があったり。あとはやっぱり連絡、明日の部活の連絡とかを、みんな LINE してたので、困ってたりはしました。』というように、高校生世代でスマホを持っていないことは、学校生活そのものを困難にすることにつながっていた。

また、生活リズムに関しても、施設・里親であるからこそその特有のルールを経験していた。たとえば、『午後の2時とかにお風呂入ったりとか、そういう違いはあるけど、明確に常識外ではないし、みたいなものが多いです。』や『お風呂の順番とか時間とかも、一応、私がいた里親のおうちは決まってる、それに合わせるとちょっとバイトがあんまり遅くできないとかっていうのはありましたね。』というものである。一方で、『正直選ぶ余地がなかったですね。絶対にバイトしないといけない施設だったんで、正直その当時のホーム長からの早くバイトしろっていう圧が正直強くて。』というように、働きたくなくても働かなければならない状況に追い詰められてしまった状況もみられた。

また、明らかに不適切な対応として、『ご飯抜きとかっていうのも結構あって。悪いことをしたりとか、そういう時があった時に、しつけの一環かなんかで食事を抜かれたりとか』といった経験も語られた。

2) 集団生活ゆえの制約、コロナの影響による制約

上記の<ルール・規則>に関連して<集団生活ゆえの制約><コロナの影響による制約>についても語られていた。大舎制の施設での生活経験のあるケースでは、『お風呂とかトイレとかも一緒に使うし、あとご飯も食堂だからみんなで食べなくちゃいけないし。時間が決まってるから、その時間に行かないと食べられなくなっちゃうし。とか、あと門限決まったりとか。どこに行くとか紙に書かないといけないとか。何時に出たとか全部細かくて、ほんとに嫌だったんで。』といったように、一緒に生活する子どもの人数が多すぎるという状況や、それにもなって集団生活を『管理』するための制約が大きくなっている様子がネガティブな経験として語られていた。

コロナ禍の影響などやむを得ない事情での制約であるという側面もあるが、子どもたちが楽しみにしていた旅行や他のホームとの交流がなくなってしまったという語りもみられた。

3) 経済的な制約

また、子ども自身が感じた<経済的な制約>については、『僕自身が多分、施設にいる時に何かこうお金を、そんなに自由に使えなかったというか。(中略)友達とかは、自由に使ってるじゃないですか。学校に行ったら、何か『これ買ってもらった』とか『あれ買ってもらった』とか。』というよ

うに、親のもとで暮らしているときにも感じていた経済的な制約が施設で暮らすようになってからも継続したこと、そして、学校での友達との会話のなかで、より一層、自分のおかれた経済的な状況について制約を感じたという語りがみられた。

4) 学習・進学機会の制約

＜学習・進学機会の制約＞については、まず、一時保護となったために登校ができずにいたが、高校からは『テストだけ送られてくるみたいな形だったので、全然やっぱり分からないし、プリント、テストだけ送られてきても分からない』という状況で、高校卒業が危ぶまれたという語りがあった。高校を卒業できるかどうかは、その後の進路に大きな影響がある。そういった状況に対する配慮が不足していた様子がみられた。また、『私より前の時代では施設から大学に行った子は一人もいないっというような状態で、「ほんとに大学いくの？」ってというような言葉をかけられたりもあったので。』というように、子どもが大学進学を希望した際に、応援する言葉ではなく、『ほんとに大学いくの?』といった疑義を呈することは、子どもが大学進学に制約を受けていると感じることにつながっていた。

5) 生活環境の不公平感

また、＜生活環境の不公平感＞に関しては、社会的養護の枠組みのなかでも、どの施設か・どの里親かによって生活環境が異なることについての経験も語られた。他施設と交流する機会を通して他施設を知り、『環境整備の度合いが全然違うなっていうので。例えば、一律同じ家賃というか、同じ形のお金を払ってたので、すごいもったいないなっていうか、やだなって思っちゃうところはあり。』というように、他の施設等と自分が暮らしている場所を比較したときに、なぜ、これほど差があるのかという不公平感があったという語りがみられた。

6) 里親・職員の対応

＜里親・職員の対応＞でのネガティブな経験は、インタビュー協力者のおよそ 3 分の 2 が語っていた。大きくは次の 4 つに大別される。何らかの事情があったにせよ里親のもとで暮らすことができないような状況に追い込まれた対応、そもそも里親・職員との関係性を構築することができなかったという対応、里親・施設での暮らしのなかで、将来に向けてより良い選択肢がとることができないような対応、明らかに不適切であると考えられる対応である。

第一に、生活の場を奪われてしまうような事態につながったケースとして、何らかの事情で里親とトラブルになり、里親から『出てけ』と言われたケースや、自身の持病が悪化してしたために里親から『面倒は見られない』と言われたために措置先の変更になったというケースがみられた。子どもにとってよりよいサポートが必要になったときに措置先が変更となっていた。第二に、まず、児童相談所の職員の雰囲気として、子どもの話に耳を傾けない、同情心、見下しているといったように子どもにとって信頼できない態度が散見されたという経験が語られた。次に、里親については、『勉強、好きじゃないタイプなんですけど、毎日、塾、いいことなんですけど、行かせてもらったり。でも、それは私からしたらすごいプレッシャーでしかなくて。』というように里親の過大な期待のほか、セクハラ、宗教の押し付けなどを理由として関係性を築くことが難しかったケースもみられ、子ども

自身の安全や信教の自由といった基本的なところで問題が生じかねない状況もみられた。また、施設においても、最初に担当となった職員に対する苦手意識のみならず、そのほかの職員についても、きちんと自分のことを考えてくれる人がいなかったため、信頼感が持てなかった経験についても語られている。

第三に、退所後の生活を見据えた対応について、サポートが得られなかったというケースでは、『奨学金の手違い。奨学金『自分でしてみても』って言われてやっていた。担当の方に寄り添ってやって欲しかったという思いがある。』という語りや、運転免許証を高校生のうちに取得できていたら現在の仕事や生活をより円滑に進めることができたという語りがみられた。さらには、中学卒業後、高校に進学せずに働くことになったケースでは、高校進学についての選択肢が示されず、なぜ働かなければならないのかといった子ども自身の気持ちに寄り添った対応をしてくれる人がいなかったという語りがみられた。最後に、明らかに不適切な対応もみられた。『児童相談所でも福祉施設でも児童養護施設でも、職員から子どもに対する体罰っていうか、そういうのが日常茶飯事』『しつけの一環だと思んですけど、午後、休みの日の午後とかで、みんなで余暇活動をするんですけど、その余暇活動の中で、厳しくしすぎた結果、児童がけがをしても、ある程度、決まった治療をされてなかった』といったように、基本的な人権が侵害されているとみられる対応をされた経験についても語られていた。

7) コミュニケーションが希薄、甘えられない環境

上記と関連して、＜コミュニケーションが希薄＞＜甘えられない環境＞があった。まず、職員との関係については、子どもが職員の忙しさや大変さに配慮して、コミュニケーションを遠慮していたものの、『時間が取れないのは分かってるけど、でも自分はこういう気持ちなんだっていうのを分かってもらえないのが、一番しんどかったっていうのはやっぱりあって（中略）話したい時に話せないっていうのが、やっぱり一番大きかったかなっていうのはありますね。』という語りや、コミュニケーションがあれば、悩みを話したり不登校を回避したりすることができたのではないかという思いも語られていた。

また、施設だけでなく里親家庭での暮らしにおいても、コミュニケーションが希薄で甘えられない環境がみられた。本音では、『欲を言えば、甘えたかったっていうのが一番大きいですね。でも、甘えたいとは思ってたけど、自分が思ってる、親への甘え方がおかしい可能性のほうが高いなと思ったので、その時。どれぐらいの距離感で接していいのかが分かんなくてっていうのが一番、困ったとかいうよりは難しかったですね。』というように、自分の気持ちを受け止めてもらえるのかといった不安や距離感が分からなかったという語りがみられた。その他には、里親が里子にとってもっともだいじなときにそばにいてくれなかったという経験も語られ、実子であればそのような対応をするのかといった疑念を抱かせる結果となってしまっている。

8) 里親の実子との対応の差

＜里親の実子との対応の差＞については、『里親さんのところは実子がいたので、何かやっぱり待遇というか、その分どうしても納得いかない部分もあった』というように、実子との対応の違いや、里子であるから事情を詳しく知りたいという里親の関わりが負担となって、里親のもとでの暮らし

にネガティブな印象をもたらしていた。

9) 一般家庭のような生活経験の不足

＜一般家庭のような生活経験の不足＞については、自分の部屋に鍵をかけずに生活するという施設での暮らしを経て、その後、地域で一人暮らしをはじめたときにも鍵をかけずに出かけてしまったために泥棒に入られてしまったという、施設等での生活が一般家庭での暮らしと異なるために生じたトラブルが語られた。

10) 他の子どもとの関係性

＜他の子どもとの関係性＞については、暴力、施設内での上下関係や意思疎通に関すること、生活スタイルに関することが語られた。まず、『当時の上の子たちから暴力を振るわれたりしてたんですけど、そこはネガティブだったなと思います。やっぱり、本当に明日があるか分かんないみたいなの。』というように、自身が暴力を振るわれたという経験が語られた。また、『子どもに対する体罰っていうか、そういうのが日常茶飯事というか、施設の中の子どもから子どもへっていうのも日常茶飯事』や『児童から児童に、けんかとかじゃなくて、一方的に暴力を振られているのに、職員が怖くて止められなかったとかっていうのが結構』というように、子ども同士の暴力の存在に対して職員がそれを止められないという状況についての語りがみられた。また、『施設では一人ひとりの意見が通じない。基本的に年上が強かった。』という状況が語られていた。そういったなかで生活して過ごすために、『他人の顔色をうかがったり』するようになったという語りもみられた。そもそも『やっぱ施設ってすごいストレスたまるんですよ（中略）別にそんな仲良くない人とかとも関わっていかないといけないし、一緒に生活しないといけないので、自分のことだけを考えて行動できないっていうのがまずあるので』というように、生活スタイルが大きく異なる他の子どもとの生活はもちろん、そうでなかったとしても、集団生活そのものが大きなストレスを生んでいた。

11) 性的な問題

＜性的な問題＞に関しては、施設内での性被害が複数回、発生していたという状況がありながらも、そういった問題が『抑えようにも抑えられていない』という実態が語られた。

(13) これまで受けたサポート

【これまで受けたサポート】は、21 のコードで構成された。全体としては、衣食住に関すること、経済的支援に関すること、社会生活を営む上で糧ようとなる手続きに関すること、安心できる居場所の提供、必要な機関への付き添い、成人式や結婚式といった人生のイベントに関することがあげられた。また、相談すること自体が難しい、相談したくないといった語りもみられた。

カテゴリー	コード
これまで受けたサポート	住まいの提供
	食事提供・食料や物品の支援
	一緒に家を探す
	行政手続きの手伝い
	社会資源へのつなぎ・同行

	一緒にごはんを食べる
	金銭管理
	経済的な支援
	生活保護・ケースワーカーの支援
	自己破産の手続き
	定期的な連絡・随時の相談
	就労支援・就職支援
	社会資源に関する情報提供
	安心できる居場所
	訪問看護
	医療機関への付き添い
	結婚式を挙げてくれた
	成人式の準備
	シェルターへの保護
	医療費の軽減
	相談するのも難しい／相談したくない

1) 住まいの提供

まず、生活の基盤となる＜住まいの提供＞については、仕事を辞めると同時に寮も出なければならなくなった状況で、『もうお金もなかったので、すごく学園と後援会の方に助けられて、やっとマンション借りられたので、そこはありがたかった』というように、差し迫った状況のときに施設の後援会のサポートが得られたという語りがあった。

2) 食事提供・食料や物品の支援

次に、＜食事提供・食料や物品の支援＞については、全体のおよそ 3 分の 1 にあたるインタビュー協力者が支援を利用したという語りがあった。

主として、アフターケア事業所 Z からの支援に関しては、食料を中心とした支援物資を受け取っている／受け取っていたというケースがあり、受け取らなくなっても、食事提供を受けていることで関係性が続いている。食料支援を契機に『なんか相談事があったりだとかはしてるって感じですね。してるというか、なんかしたいなというか。』といったように、随時の相談支援につながっている様子がみられた。またコロナ禍においても、薬や検査キット、経口補水液の提供を受けたというケースもあり、緊急時の支えとなっていた。

また、もともと暮らしていた施設からの『何か今困ってることある？』という連絡をきっかけに『正直、食べ物にも困ってます』という話をするのができ、日用品とか食料などを継続的に届けてもらっているという。その他にも、社会的養護経験者の支援団体から、『なんかいろんな面で気に掛けてくださって。自分が、なんか電話した時に、『1 日お米、2 合から 3 合ぐらい食べるんですよ』って話をしたら、お米くださったり。そういう物くれるとかではないんですけど、そういう細かいところから拾ってくださる人っていうのがいるので。』というように、食料支援を通じて支えられているという気持ちをもつことにもつながっているという語りもみられた。

3) 一緒に家を探す

また、生活の基盤となる住まいについて、当時未成年の19歳で家を借りる際、保証人が必要であったが、家族に頼ることはしたくないという思いがあったため、保証人を立てなくても良いところをアフターケア事業所Zと一緒に探したという語りもあった。

4) 行政手続きの手伝い

行政手続きに関するハードルは、子ども・若者にとってはとりわけハードルが高い。＜行政手続きの手伝い＞に関しては、親から保険証を取り上げられてしまった際、アフターケア事業所Zに相談したところ、親と施設職員などの『大人たちが協力してくれて』、新しい保険証を作ることができたという語りもみられた。

5) 社会資源へのつなぎ・同行

＜社会資源へのつなぎ・同行＞については、措置解除前に暮らしていた施設等やアフターケア事業所Zをはじめとした社会資源は、非常に重要なサポートになっている。

まず、アフターケア事業所Zに関しては、『施設の職員から』の紹介であるという語りが多くみられた。施設職員といういわば信用できる立場からのつなぎであるという点は重要であると考えられる。具体的には、『自分が施設に在園してる時に、担当の職員の者から紹介があって（中略）やっぱり食事面が不安だったので、そういう頼れる所には頼ろうと思って。』、『施設出るタイミングで、何か奨学金の話が出て。奨学金のやりとりの仲介みたいのを何かアフターケア事業所Zさん。』というケースや、紹介してもらったあとに、自らZの事務所に出向いて行ってつながりが生まれたというケースもみられた。加えて、通信制高校に在学中、担任教師からアフターケア事業所Zにつながったケースもみられた。

その他にも、体調不良や失業が重なった際、施設の職員に相談したところ、生活保護に関する情報や、一緒に役所に付き添うというサポートをしてもらったという語りもあった。

6) 一緒にごはんを食べる

＜一緒にごはんを食べる＞ことが、ともに過ごす大切な時間になっているケースもある。アフターケア事業所Zにおいて、『一緒にお昼ご飯を食べてちょっとおしゃべりして、寄付のお洋服とかご飯とか、そういうスキンケア用品とか、ある時は頂いてって。そういう生活援助の面でも。』というように、＜一緒にごはんを食べる＞という時間をともに過ごすことを通して、不安なことについて相談し、『1人でやるの不安だなんていう手続きの時とか』に、必要なサポートを得ることにもつながっていた。

7) 金銭管理

＜金銭管理＞について悩みを抱えるケアリーバーは少なくない。そのため、『とにかくほんとにお金の扱いが下手くそなので（中略）一回、区役所でも何かやってもらった記憶はあるんですけども、もう少し具体的に、こうしたほうがいい、みたいな、そういうアドバイスから入ってくれたらうれしいな、みたいなものもあるんです。』というように、ていねいなサポートが求められている。

8) 経済的な支援

＜経済的な支援＞は、まず、施設等退所時の一時金がある。それは重要な経済的支援ではあるが、『卒園する時に（中略）一応 10 万円分ぐらいをプレゼントっていうか、要は生活に必要な物を買えるみたいなやつがあったんですけど、そのぐらいですかね。』『なんか初期費用ぐらいしかなくて、アパートの。』のように、まさに一時的なものであり、退所後の最初の 1 か月を暮らすためにも不十分であると思われるものであった。他には、県内で就職した場合に家賃分を補助してもらえるという制度を利用したケースもあった。仕事をやめてしまうとその分返却する必要があるが、仕事を継続しているため、受け取ることができる見込みであるという。以上は給付型であるが、貸与型のものとして県社会福祉協議会の奨学金は進学して卒業後 5 年間就労で返還不要となるため『実質給付』になるものを利用していたが、卒業できていないため返還が求められてしまう可能性があるという語りもあった。

9) 生活保護・ケースワーカーの支援

インタビュー協力者のなかには、生活保護を利用している方も少なくない。利用にいたる経緯としては、『会社辞めた後に、コロナと自分の体調の不安定もあった』といったケースのほか、さまざまな事情がみられる。＜生活保護・ケースワーカーの支援＞について、『医療費は現状、ありがたいことにかかってはいないんで、自己負担分はない』というように生活保護の利用によって治療が受けやすくなったというポジティブなものもあれば、『ケースワーカーさんと相性が微妙っていうか。なんか冷たい、冷たく感じるんですよ。優しく見えて冷たいっていうか、怖い。怖く感じるんですよ（中略）言葉ではすごい優しく感じるのに、奥底で冷たさを感じるっていう。それが嫌でなるべく話さささと済ましちゃいたいみたいな。』という語りもみられた。

10) 自己破産の手続き

＜自己破産の手続き＞は、カードローンが膨らんでしまい返済困難となった際、もともと暮らしていた施設の職員に相談し、職員から弁護士を紹介してもらい、自己破産の手続きをしたというケースがあった。自己破産の法的な手続きはケアリーバーの若者のみで対応するのは極めて困難であり、重要な支援であったと考えられる。

11) 定期的な連絡・随時の相談

＜定期的な連絡・随時の相談＞について、相談する側にとって重要な点は、サポートに携わる機関・職員からの連絡があること、ないしは、定期的にコンタクトを取ることができる関係があることである。まず、『私 T 県に来ちゃったけど、向こう C 県なのに連絡くれてるから。それがうれしいなと思います。（中略）3 カ月とか半年に 1 回ぐらいの感じで電話くれてたりしましたね。こっちから電話することもあったりとか。』『向こうから連絡をしてくれて』という語りにみられるように、機関・職員の側からコンタクトをとるという形での連絡が安心感を生んでいるようである。また、生活保護の利用に伴うケースワーカーの定期的な訪問や、精神科への定期的な通院、訪問看護の定期的な訪問など、定期的なコンタクトを取る関係性は、必要なときに必要な相談がしやすい状況をつくる

基盤になっているとみられる。

12) 就労支援・就職支援

＜就労支援・就職支援＞については、施設退所後、社会的養護を経験した子どもを支援している NPO 団体の弁護士のサポートで、就労先が見つかったというケースや、再就職の際に、施設のついで寮付きの仕事や「第二新卒」のような形で職に就くことができたケースがあった。また、体調悪化ののち、回復途上のため、アフターケアサービス事業所のサポートを得て福祉的就労として就労移行支援につながったというケースもあり、さまざまな機関のサポートを得ている様子がみられた。

13) 社会資源に関する情報提供

＜社会資源に関する情報提供＞については、社会的養護のもとで暮らしていたときに、渡されていた『はがき』があり、つらい出来事が生じた際にその『はがき』に書いて助けを求めることができたという語りがあった。

14) 安心できる居場所

＜安心できる居場所＞については、『アフターケア事業所 Z さんにつながって、ここに来ていいんだっていう場所があるのはやっぱり大きいことだっていうのは思ってます。(中略) やっぱりスタッフさんとの関係性も大きいですし、私にとってもそういう場所があるっていうだけでかなり大きいことなので、そういう場所とつながれて良かったっていうのはほんとに思っております。』、『(補足：アフターケア事業所 Z が) 結構コミュニケーション取ってくれるから、それ良かったっす。』といった語りがみられた。

15) 訪問看護

＜訪問看護＞は、『月に一回の病院行く時に、訪問看護の方に 1 カ月どうだったかみたいな話をしたりとか、市役所の方とかに市役所行く用事があったら声掛けてくださったりしてるのはすごいありがたいですね。』というように、加療が必要な状況のなかで、訪問看護の存在の重要性が語られていた。

16) 医療機関への付き添い

＜医療機関への付き添い＞については、『S さん（機関名）さんがいつも病院一緒に来てくれてたんで、それはすごい助かったなって思ってます。』、『訪問看護の方と一緒に病院に行ったりしてるんですけど。それも月、今一回行って、行けたり行けなかったりが結構続いてたんですけど、最近是一緒に行けるようになりましたね。』というように、生命に関わる通院について、付き添いが大きな助けとなっているという語りがみられた。

17) 結婚式を挙げてくれた

人生の大切なイベントでもある＜結婚式を挙げてくれた＞については、『すごくうれしかった』支援として記憶されている。支援団体に自身が結婚するということを伝えたとこ、『結婚式を挙げな

いの?』と言われ、『挙げるほどの資金もないので、ちょっと挙げない予定です』と話をしたところ、結婚式を挙げてもらえることになり、施設内の会場を使って有志によって行われたという。

18) 成人式の準備

成人式も人生の重要なイベントの1つでもある。暮らしていた児童養護施設の後援団体が成人式等振袖等を貸し出すという支援を利用できたという語りがあった。

19) シェルターへの保護

＜シェルターへの保護＞については、出会い系サイトで『やばい感じの人と連絡取ってしまって』、深刻な状況になった際、警察を経由して女性相談センターで保護されたという語りがあった。喫緊の状況のなかでシェルター利用につながっていた。

20) 医療費の軽減

＜医療費の軽減＞については、難病手帳と保険証で、医療費の自己負担額が軽減されているという語りがあった。治療を継続するうえでの助けとなっている。

21) 相談するのも難しい／相談したくない

これまで受けたサポートに関する質問をしたところ、インタビュー協力者の少なくない方々が、＜相談するのも難しい／相談したくない＞という思いを語っていた。その理由には、相談する余裕がない、相談するのが苦手、相談してはいけないというプレッシャーがある、過去に相談したが頼りにならなかった・機能していなかった、相談するのがめんどろ、相談しないことに慣れてしまっているなど、さまざまなものがあった。

具体的な語りをみると、『精神的にも結構やられる感じもありました。いろいろ1人で全部やらなきゃいけないんで。もともと私も出た当初、お金があったわけじゃないんで、どんどん減ってく。でも、収入を得なきゃいけないっていうプレッシャーみたいなのがあって。結局、周りに相談できず、1人でずっと引きこもっちゃって』、『「頑張ってるね」で終わったような記憶がありますね（中略）じゃあ誰に頼ったらいいんだろうっていうのが全く分からなくなってしまって。そこが一番、心細かったです。』、『共に走る者ですよ。伴走者っていう名前が変わって一緒にやってくんだみたいな。だから、たまに連絡していいっていうことを言われてはいるんですけども。でも、実際問題、何か話したからといって何か直接的なサポートもらえるかっていったら、多分もらえはしないのかなっていう現状。やっぱり弁護士さんも仕事柄忙しくてあんまり時間は取ってくれない感じはするので、あんまり機能してないって私自身は思います。』という語りにみられるように、相談するのも難しい／相談したくないという状況は、周囲がつくりだしている可能性が高いのではないだろうか。

(14) もっと経験したかったこと・改善が必要なこと

【もっと経験したかったこと・改善が必要なこと】は、社会的養護を必要とし、施設や里親で育つなかで感じてきた思いや経験にもとづく多くの願いや要望が多岐に渡って語られた。よって、カテゴリは、語られた内容をコードとして整理し、さらに、その意味内容ごとに下位コード[]としてまと

めた。

【もっと経験したかったこと・改善が必要なこと】は、＜社会的養護のあり方＞、＜児童相談所＞、＜適切な養育環境＞、＜社会的養護を離れた後の支援＞、＜日本社会のあり方＞の4つのコードで構成されていた。

カテゴリー	コード
もっと経験したかったこと・改善が必要なこと	社会的養護のあり方
	児童相談所
	適切な養育環境
	退所後の支援
	社会のあり方

1) 社会的養護のあり方

＜社会的養護のあり方＞は、施設や児童相談所等の主となる機関を問わず、多岐にわたって目指されるべき社会的養護のあり方、制度や支援について語られたものであり、さらに[社会的養護への偏見をなくす]、[あきらめへのアプローチ]、[セクシュアリティの尊重と理解]、[トラウマ・子ども虐待等への理解と啓発]、[一人ひとり大切にされる]、[子どもにやさしい相談プロセス]、[子どもの声を尊重してほしい]、[社会資源の拡充]、[自分の情報（持病・家族他）への説明]、[子ども自身が社会的養護の制度を理解する]、[社会的養護経験者との交流]という11の下位コードで構成されていた。

コード	下位コード
社会的養護のあり方	社会的養護への偏見をなくす
	あきらめへのアプローチ
	セクシュアリティの尊重と理解
	トラウマ・子ども虐待等への理解と啓発
	一人ひとり大切にされる
	子どもにやさしい相談プロセス
	子どもの声を尊重してほしい
	社会資源の拡充
	自分の情報（持病・家族他）への説明
	子ども自身が社会的養護の制度を理解する
	社会的養護経験者との交流

[社会的養護への偏見をなくす]は、『自分から口に出して言うべきではないっていうか、そんな感じの人とかもやっぱりいたんで。だから、施設で暮らしていることを隠している人とかも、中には結構いると思うんですよ。』のように、社会的養護で育ったことに対する偏見についての語りがあり、そうした偏見がなくなることを願う語りがあった。

[あきらめへのアプローチ]は、『自分が養護施設出身だから、ちょっと諦めみたいなのが昔からあって、諦め癖じゃないけどなんかしょうがないよな』といった語りのように、生い立ちや施設での経験から意欲や目標をもちづらい状態があること、子どもがそうした状態にあることを理解したうえでのアプローチや支援についての語りがあった。

[セクシュアリティの尊重と理解]は、LGBTQを含めた多様なセクシュアリティへの理解がなされていないことについての語りがあった。

〔トラウマ・子ども虐待等への理解と啓発〕は、『もっと早く自分で気付いてればとか、周りの大人が気付いてくれてればみたいな思いはものすごくありますね。』のように、学校や周囲のおとなが虐待やトラウマについて理解してほしいという要望についての語りがあった。

〔一人ひとり大切にされる〕は、『そこにいる当事者の人たちは、1人の、1人ずつの人生だと思うので、そこはやっぱり何のものにも代えがたいのかなと』のように、集団生活をしていたとしても一人の存在として尊重してほしい、個性性を大切にしてほしいという思いについての語りがあった。

〔子どもにやさしい相談プロセス〕は、子どもにとって相談するということのハードルの高さ、助けが必要な子どもに伝えるべきメッセージ等子どもにとってやさしい相談のあり方についての語りがあった。

〔子どもの声を尊重してほしい〕は、『ちょっとうまくは言えないんですけど、子どもを見下すとか同情するではなく、子どもを一人の人間として扱ってほしいなと思ってます。』のように、子どもを人として尊重し、子どもの声をきいた後具体的な行動や対応について説明してほしいといった要望についての語りがあった。

〔社会資源の拡充〕は、『基本は空き待ちの状態ってよく聞くので、もうちょっとホーム増やしたほうがいいんじゃないかなとは思います。』のように、子どもが育つ社会的養護の資源が十分でないことや、職員が多忙であることから十分に対応してもらえていないと感じた経験から、より社会資源が拡充されることを願う語りがあった。

〔子ども自身が社会的養護の制度を理解する〕は、子ども自身が施設や里親制度の仕組みについて理解したいといった要望についての語りがあった。

〔自分の情報（持病・家族他）への説明〕は、自分がなぜ社会的養護を必要としたのかという理由について十分な説明がほしかった、自分の持病等についても詳しく知りたかった等自分にかかわる情報を丁寧に伝えてほしかったという要望についての語りがあった。

〔社会的養護経験者との交流〕は、入所中に社会的養護で育った経験のある人と交流があることや、退所後に社会的養護経験者と交流できる会についての情報を得たかったという語りがあった。

これらの語りは、今後の社会的養護をより良いものにしていくうえでのヒントが多く読み取れる。

2) 児童相談所

＜児童相談所＞は、特に児童相談所にかかわる要望について語られたものであり、〔早期の保護〕、〔意思確認や状況説明の必要性〕、〔児童相談所の対応〕、〔一時保護所の改善〕の4つの下位コードで構成されていた。

コード	下位コード
児童相談所	早期の保護
	意思確認や状況説明の必要性
	児童相談所の対応
	一時保護所の改善

〔早期の保護〕は、長く家族からの暴力を経験しており、もっと早く保護されたかったという思いについての語りがあった。

〔意思確認や状況説明の必要性〕は、『一応施設に行くことは教えてもらったんですけど、いつ行

くとかは分かんない。結構直前まで分からない感じで。いつまでその保護所にいるんだろうっていうのはありましたね。』のように自分が置かれている状況について説明が十分になされないことや、今後の見通しについて教えてもらえないことについての経験とそうした状況を変えていく必要性についての語りがあった。

〔児童相談所の対応〕は、『私個人的には、児相の介入がもうちょっと多くてもいいのかなとか、距離を測れる子ばかりじゃないと思うので。』のように措置にかかわるが決定してからの児童相談所およびケースワーカーの対応や、措置決定前までの対応に関する語りがあった。

〔一時保護所の改善〕は、『もうちょっとルールが柔らかくなると助かったなというか。結構大変だったの。』のように一時保護所のルールや規則が厳しくつらい経験であったこと、そこを改善する必要性についての語りがあった。

3) 適切な養育環境

＜適切な養育環境＞は、施設や里親家庭での養育環境について語られたものであり、[スマホおよびIT環境の整備]、[暴力被害に遭わない]、[きょうだいと一緒に暮らす]、[家事や生活スキルの向上]、[金銭管理]、[自立に向けた意識醸成]、[差を生まない生活環境]、[友達宅へのお泊り]、[施設の外と関係をつくる]、[習い事等の経験]、[気にかける・向き合う]、[職員が働く環境の改善]、[進路の情報提示と保障]の13の下位コードで構成されていた。

コード	下位コード
適切な養育環境	スマホおよびIT環境の整備
	暴力被害に遭わない
	きょうだいと一緒に暮らす
	家事や生活スキルの向上
	金銭管理
	自立に向けた意識醸成
	差を生まない生活環境
	友達宅へのお泊り
	施設の外と関係をつくる
	習い事等の経験
	気にかける・向き合う
	職員が働く環境の改善
	進路の情報提示と保障

〔スマホおよびIT環境の整備〕は、『クラス会するってなった時に、僕だけ情報を知らないとか。そういうのがあったんで。そこは困りましたね。』のようにスマホや携帯を持てなかったことによる不利益と周囲と同じような環境が必要であるという要望についての語りがあった。

〔暴力被害に遭わない〕は、養育環境のなかで暴力があったこと、そうした被害を生まないことについての語りがあった。

〔きょうだいと一緒に暮らす〕は、きょうだいと同じ施設に措置されず、きょうだいと一緒に生活をしたかったという要望についての語りがあった。

〔家事や生活スキルの向上〕は、『最初の頃ってほんとに物価の相場っていうのが分からなくて、何を具体的に買えばいいのかとか、1回の買い物でどういうものを買って、どういう野菜を買って持

って帰ればいいのかっていうのが分からなくて、野菜丸々1個駄目にしちゃったりとか』のように、社会的養護を離れた後に一人で生活する際の具体的なスキルにかかわるものであり、入所中に経験しなかったという経験や思いについての語りがあった。

〔金銭管理〕は、『お金の管理とか。結構急に自分で大きなお金を渡されたんで、これ今から自分でちゃんと使ってみたいのがちょっと難しいです。』のように、金銭感覚やお金の管理について困った経験についての語りがあった。

〔自立に向けた意識醸成〕は、『自分で探すとかより、自分より大人の人たちが『これはどう？』みたいな感じでいろいろ教えてもらえるほうが自分の知らないやつが出てきたりするから。そういうのが参考になるなって。』のように進路や就職に向けて一緒に考え、行動するような支援についての語りがあった。

〔差を生まない生活環境〕は、『電車とかも、最初は全く分かんなかったんですけど、今は慣れたからあれだけど、出た時は何も分かんなかった。』のように施設で育った環境において経験できなかったことが、社会的養護を離れた後に本人に負荷をかける経験についての語りがあった。集団生活や社会的養護の仕組みで育つからこそその制限を減らしていく必要についての語りがあった。

〔友達宅へのお泊り〕は、『友達とお泊まり会だったりとか、ちょっと遠くに旅行しに行きたいとかっていう面が結構、みんな周りの子は多かったですね。お泊まり行きたかったとか。そういうので不満が結構、募っちゃって、門限とか結局は破っちゃうしとか、そういうのはありましたね。』のように施設のルールのなかでも友達宅へのお泊りは実現したかったという要望についての語りがあった。

〔施設の外と関係をつくる〕は、施設のなかで人間関係が完結しがちであるため、もう少し外の人間関係をつくるための働きかけが必要であるという課題についての語りがあった。

〔習い事等の経験〕は、施設では習い事を経験できなかったが、そのような経験が必要であるという課題についての語りがあった。

〔気にかける・向き合う〕は、『私はやっぱり、もうちょっと自分のことを考えて、職員と向き合って、変な話、もっとぶつかって、けんかしたりしてよかったかなと思いますね。』のように養育者に聞いかけてほしかった、向き合いたかったという養育者に対する要望についての語りがあった。

〔職員が働く環境の改善〕は、職員の働く環境が子どもの支援に直結することから、職員の働く環境を改善する必要についての語りがあった。

〔進路の情報提示と保障〕は、『正直に言うと、大学に行きたかったんですけど、そういう制度があるって知らなかったんですよ。施設を出たら、もうそこで終わりじゃないけど、施設を出たらもう働かなきゃいけない、一人で生きてかなきゃいけないっていうのがすごい何か、ずっと頭にあって。』のように進路に関する情報が詳しく提示されること、卒業までの見通しについて知りたかったという要望についての語りがあった。

これらの語りからは、社会的養護における適切な養育を構成する要素が多く読み取れる。

4) 社会的養護を離れた後の支援

＜社会的養護を離れた後の支援＞は、社会的養護を離れた後に必要だと考える支援について語られたものであり、〔退所後のサポートの強化〕、〔つながりがほしい〕、〔仕事に必要なスキル獲得〕、〔措

置延長]、[社会保険等公的な手続き]、[社会資源に関する情報の提示と認知]、[経済的・物品・日用品等の支援]、[運転免許取得への助成] の 8 の下位コードで構成されていた。

コード	下位コード
社会的養護を離れた後の支援	退所後のサポートの強化
	つながりがほしい
	仕事に必要なスキル獲得
	措置延長
	社会保険等公的な手続き
	社会資源に関する情報の提示と認知
	経済的・物品・日用品等の支援
	運転免許取得への助成

〔退所後のサポートの強化〕は、『何かいろいろ子どもたちは、周りからじゃ分からない悩みとかってやっぱあると思うので、それをうまく聞いて、何か少しでもその子たちの助けになるように、コミュニケーションを取っていただけたらな』とあるように、社会的養護を離れてから厳しい状態になることを踏まえ、サポートを強化してほしいといった思いについての語りがあった。

〔つながりがほしい〕は、退所後に必要なサポートに、『つながりがほしい』という思いについての語りがあった。

〔仕事に必要なスキル獲得〕は、社会人として知っておくべきマナー等が知りたかったという思いについての語りがあった。

〔措置延長〕は、進学を希望した子どもが施設に居住できる仕組みの必要性についての語りがあった。

〔社会保険等公的な手続き〕は、『自分がほんとに多分、自分がけんか別れして退所してるので何も言えないんですけど、もうちょい公的な手続きのやり方とか、何も知らないで出ていっちゃったのは、ほんと後悔してますね。聞いとけばよかったとか、あとは教えてほしかったなとかっていうのはあります。』にあるように、社会保険だけでなく様々な公的な手続きについての語りがあった。

〔社会資源に関する情報の提示と認知〕は、『知らないっていうのは一番あると思うんですけど。みんな、たぶんそうだと思うんですけど、そういう困った何かことがあった時に、そういうサービスがあるって知ってる状態から、サポートを知らないから求めることもできないしっていうのが、ちょっとあるかもしれないです。けど、どこまでそういうのに頼っていいのかっていうか。』のように頼りにしてよい社会資源の内容等について知りたかったという思いについての語りがあった。

〔経済的・物品・日用品等の支援〕は、経済的な支援や子育てにかかわる支援等さまざまな支援に関する思いについての語りがあった。

〔運転免許取得への助成〕は、運転免許取得に関する何らかの助成についての語りがあった。

5) 日本社会のあり方

＜日本社会のあり方＞は、広く日本社会のありようにかかわる不満や要望について語られたものであり、[労働環境の改善]、[医学の発展]、[政治のあり方] の 3 つの下位コードで構成されていた。

コード	下位コード
社会のあり方	医学の発展

	政治のあり方
	労働環境の改善

〔医学の発展〕は、今よりも医学が発展し続けることを願う語りがあった。〔政治のあり方〕は、社会のなかでそれぞれの役割が十分果たされることを期待する語りがあった。〔労働環境の改善〕は、時給を上げること等賃金についての語りがあった。

第 6 章 本調査のまとめと提言

ここまで千葉県・千葉市の社会的養護を経験した方々のうち、インタビュー調査にご協力くださった 31 名の方々（以下、調査対象者）による措置解除後の生活についての意見や思いをまとめてきた。本調査のまとめに入る前に、まず、本調査が実現した背景について触れたい。

本調査は、調査対象者の方々が、自分たちが経験したことを、社会的養護を必要とする子ども・若者の支援や制度施策に活かしてほしいという思いで語ってくださったものである。これらの語りは、調査対象者自身の現在の生活や人生に直接影響を及ぼすものではなく、あくまでも、自分たちではない、現在社会的養護を必要とする子ども・若者に還元されることを願ってなされたものである。改めて、調査対象者の方々が語ってくださったことに対し、心からの敬意と感謝の意を表したい。そして、千葉県・千葉市の社会的養護施策および支援に携わる方々には、こうした調査対象者の思いや意見を真摯に受け止め、今後の施策や支援にぜひ活かしていただきたいと願っている。

そして、本調査は、CANS（ちばアフターケアネットワークステーション）のご協力なしには実現し得なかった。まず、31 名もの多くの調査対象者の方々が、調査にご協力くださったのは、CANS による仲介があったからこそである。調査対象者の中には、連絡が途絶えがちな方も少なくなかったが、CANS が間に入ってつないでくださったことで、また、CANS に対する信頼があったからこそ、多くの方々がインタビューに応じてくださったと考える。また、調査対象者にとって、施設や里親での経験を思い出すこと、それについて語ること自体が精神的に大きな負担となり得る。場合によっては、本人の安全をおびやかすおそれもある。ワーキングチームのみでは、そのような精神的負荷に対する十分な支援を提供することが難しい中で、インタビューの前後に CANS の支援者が調査対象者を精神的にフォローしてくださったことは、調査対象者の安全性を確保するうえで、非常に重要な役割を果たしてくださったと考える。

以下では、本調査を通して明らかとなった、調査対象者が直面している課題や、今後求められる支援のあり方について述べる。

1. 複合的困難、生活の危機

インタビュー調査では、住まい、就学、就労、心身の健康等、複数の困難やリスクが重なり、生活が立ち行かなくなるなど生活破綻が危惧される語りもみられた。例えば、ひとり暮らしと進学、アルバイト等が同時期に始まるなか、バイト先のパワハラや、勉強、家事等のきつさで体調を崩し、「早い段階で挫折」と語った人は、大学進学 1 か月で中退されていた。先天性の持病があり、身体を壊して入院、それを機に退職した人は「働いたのは 1 年半ほど」と語る。コロナ渦で収入も減る中、「体調を一気に崩し、それが重なって退職」という語りもあった。施設退所後に、一人で全部やらないといけない、収入を得ないといけないというプレッシャーのなかで、周りに相談できず、学校にも行かなくなり、引きこもり、「自暴自棄」になって貯金を使ってしまったという語りもある。

不安定でギリギリ持ちこたえていた生活が、職を失う、病気になる、いじめやハラスメントに遭うなど、何かをきっかけに連動して崩れていくような、生活基盤の脆さがうかがえた。施設等を離れた後の生活の危機を想定、前提においた支援策が急務である。

2. 生活水準と家計および住居

今回のアンケート調査で「収支の方が多い（黒字）」と回答したのは 23.7%で、全国調査の結果 26.8%よりやや低くなっていた。また、「支出の方が多い（赤字）」との回答 26.8%と全国調査の 22.9%と比してやや多く、収支の状況の厳しさがうかがえた。

また、インタビュー調査からは、住居や家計に関する困りごとはないという語りもあった一方で、生活保護を必要としていたり、自己破産などの経済的な困窮を経験している方もいた。こうした中で、住居探しや経済的な支援について相談できる場の重要性は一際大きいといえる。

3. 進学に関する情報保障と伴走支援の必要性

安定した生活基盤をつくるうえで、高等教育の達成は大きな意味をもつ。

現在の就学状況について、今回の千葉アンケート調査では、「学校に通っている」が 16.1%であり、全国調査の 23.0%より低かった。一方、就労状況では「働いている」（パート、アルバイト等を含む）は、千葉が 72.8%、全国が 71.0%であり、千葉の方がやや高くなっている。

インタビュー調査では、中退したから施設を出なければならないと思っていた、お金が無いため中退あるいは進学を断念した、親に進学をとめられた、全て自分で判断しなければならず相談もできず学校に行かなくなったなどが語られ、進学及び就学の継続に向けての支援不足、生活基盤の脆さが危惧される。本調査では、調査対象者 31 名のうち、大学在学中・大学卒は 3 名であった。実際に高等教育を達成した調査対象者の数に対して、インタビューにおいては、大学や短大には希望したができなかったという語りが複数みられた。このことは、(14) もっと経験したかったこと・改善が必要なことにおいて、より具体的な形で進路の情報提示と保障について語られた。アンケートでは浮かび上がりにくい「進学したかった」という思いを真摯に受け止める必要があると考える。進学についての情報を提供されること、ともに考え伴走してもらふ支援、奨学金の情報等、進学から卒業達成までの細やかな支援が求められる。

4. 心身の不調と支援の継続性

心身の不調を抱えるケアリーバーは少なくない。アンケート調査では、対象者のうち 19.6%が何らかの通院をしていることが明らかとなった。その背景には、子ども時代からのトラウマや心理的負担の蓄積があると考えられる。

また、ケアリーバーの語りからは、通院や生活保護の利用にはつながっているものの、それらの支援が断続的で一貫性を欠いているとみられる生活状況もあった。つまり、現在の生活の困難さに対して手当がなされているだけであり、子ども時代の逆境的体験に対する根本的なケアには至っていないという課題がみられた。こうした状況を踏まえると、子ども時代から継続的かつ切れ目のない支援体制の構築が求められる。

5. 原家族との関係性と将来展望への影響

原家族との関係については、ネガティブな体験が多く語られており、社会的養護を必要とした子ども時代の状況から、現在に至るまで親との関係が大きく変化していない事例も少なかった。こうした背景から、自分とは異なる家族を築きたいという前向きな語りがある一方で、将来に対する悲観

的な見通しや、「子どもをもつこと」への不安や否定的な感情として表れる語りも確認された。

6. 里親・施設等の事情による措置変更に伴う子どもの負担の大きさ

要保護児童として措置されることは、子どもの生活環境の大きな変化を意味するため負担を伴うものである。里親・施設等の事情によって子どもが望まない形での措置変更が行われることは、子どもにとって理不尽な経験であるだけでなく、支援者や支援機関との信頼関係の構築を阻み、措置解除後の生活にも深刻な影響を与える可能性がある。そのため、改めて子どもを中心とした慎重な対応と、里親・施設等へのサポートも含めた対応が求められる。

7. 支援へのアクセスと支援者の役割

社会的養護のもとでの職員等支援者との関係が良好であり、信頼できる施設等からの紹介であるからこそ、措置解除後の子ども・若者はアフターケアサービス事業所等の支援機関等に安心してアクセスできるという現状が改めて確認された。一方、客観的には困難を抱えているとみられる場合であっても、相談したくない、あるいは、相談すること自体が難しいという状況もみられ、支援者側からのアプローチが孤立や事態の深刻化を防ぐためには重要である。つまり、支援の窓口を設置すればよいというものではなく、「気にかけてもらえる」、「関心をもってもらえる」という支援者からのアプローチが、調査対象者がその苦しさを打ち明ける一歩となっている。また、制度と制度の隙間に陥ってしまいやすいからこそ、社会資源をつなげる支援も求められている。調査対象者によって語られた（13）これまで受けたサポートは、調査対象者にとって「よかった経験」として受け取られたものであり、今後の施策の参考になる点が多いと考える。

8. 社会的養護と子どもの権利

社会的養護の営みは、本来、子どもの権利を保障し育ちを支えるものである。しかしながら、子どもの育つ環境が、集団生活を基本にしたルール等によって大きく制限されることで、年齢に応じた子どもの基本的なニーズが満たされにくい状況があった。また、そうした制限ある生活のなかで身につけざるを得ない「あきらめ」という姿勢が、調査対象者が前向きに意欲をもって生きることを阻害している側面があった。さらには、施設での生活において生じた被害の体験が、時に子どもの権利を奪うようなネガティブな経験として記憶されている実態も報告された。このような子どもの安心・安全が脅かされる経験は、決してあってはならないものである。一方で、（11）里親・施設でのポジティブな経験の語りから分かるように、安全・安心が確保された状態であることを基盤として、子ども自身の思いや葛藤を受け止めてもらえたと感じられた経験が重要なものとなっていた。家事・炊事、金銭管理といった社会生活を営む上で必要となる生活スキルを獲得できたこと等が大きな支えとなっていたという声もあり、日常的なケアの質の重要性が示唆されている。また、今後に向けては、社会における社会的養護への偏見をなくすとともに、トラウマ・子ども虐待等への理解と啓発や、子どもにやさしい相談プロセスを構築していく必要がある。

千葉県・千葉市施設や里親家庭等で生活していた方の
生活やサポートに関する調査 第三報（2025 年 10 月）

千葉県における社会的養育経験者等の実態調査 WG チーム

※本報告書の無断転載を禁じます

社会的養育経験者等の支援者・養育者に対する調査 「アフターケアの現状とこれから」

概要

「アフターケア」とは、児童養護施設など、家庭に代わる場所で育った若者たちが社会に巣立ったあとの支援を意味します。18歳で措置解除を迎えたあとの進路は多種多様で、支援する側としてもどのようにサポートすべきか、日々模索されている方も多いのではないのでしょうか。

そこで当団体「ちば子ども若者ネットワーク」では、アフターケアの現状と課題、今後の可能性を探るため、千葉県内の児童養護施設や児童相談所、支援機関など計27の現場で働く方々にインタビュー形式でお話を伺いました。

この記事では、調査結果をまとめてご紹介します。

調査結果

■ 社会的養育経験者等の状況と支援の実態

事例紹介 —— 対応に苦労したケース

- ・ 経済的問題

● "物販販売で儲けられるからと、出資金100万払ってくれたら、コンサルタントでやり方を教えてあげて...そういう詐欺に遭った子が実際に...アイフルとかアコムだったかな、2つから50万ずつお金を借りて..."

● "闇金にお金を借りたくなって、今非生活が困窮してて、そういうところに手出しそうな子に、そうじゃない方法があるんじゃないあという投げかけとか"

• 就労関連

● "ぱっと見わからないような感じの子が、仕事がうまくできない。長く続けられないとか今そもそも仕事が本当にできる仕事がないとか、数回行っただけで辞めちゃう。"

• メンタルヘルスの課題

● "リストカットして発見されて警察が関与してうちに連絡が来た...自立支援ホームでもやらかしてそこを出なきゃいけなくなった...でもそこでもリストカットして救急車で運ばれて..."

• 連絡不通・関係性の途絶

● "連絡が取れなくなることの方が心配というか、やりようがなくて、心労はかかるなど。それでも連絡が取れてれば大変なんだけど、できることはお手伝いしてあげたりとか。"

● "突然連絡が取れなくなってしまうケースどんなケースでもあるんですけど、相談してきて、例えば次はこの日に会おうとか、約束の連絡を入れても、やっぱり返信が返ってこないだったり、着信拒否であったりだとか"

● "連絡が取れなくなってしまうと、本当に何もできなくなってしまうというか、その連絡が取れないっていうのがやっぱり苦労というか困るケースかなと思います"

困難を抱えやすいケースの特徴と支援上の課題

・ 発達障害等のグレーゾーン・ボーダーライン

● "ボーダーラインのケースで、障害受容ができてないがために、障害の支援に繋がれない、支援を受けられない、というところが難しい"

● "発達に障害を抱えている、特にボーダーというか、手帳がもらえそうでももらえないんだりとか、やっぱりそういった子が苦労するかなって。見た目で判断というか第1印象は良くても、何か実際仕事を始めたら、言い方は悪いけど、ところが出ちゃう"

● "知的にも発達のにもボーダーのラインで生活をしているお子さん、ADHDだけれども特別支援学級ではなくて普通学級の中で何とか頑張れるお子さんが卒業したときに、高校でうまくいかなくなってしまう"

● "コミュニケーションが難しい子は自分のことをしっかり伝えられなかったり、気持ちを言えない子はやっぱり、結構転々としちゃったり、本当はやりたくないような仕事をやらざるを得なかったり"

- 誰かに頼ろうという気持ちを持てる経験が無い場合

💬 "親が頼れなくても、関わった支援者等誰かしらにちゃんと見てもらった、心配してもらったという経験があり、かつそうした人と連絡取り合える関係性が続いていると支援がスムーズ。うまくいかない、生活困窮することはよくあるけれど、それでもこれまでそうした大人と関係を紡いでこれたか、そういうベースがない若者は大変。"

💬 "うまくいかない、生活困窮することはよくあるけれど、それでもこれまでそうした大人と関係を紡いでこれたか、そういうベースがない若者は大変。手がかりがない。できるかぎりのことをしてそれが後のてがかりになるような思いで関わるが…。社会的養育を経験した若者の中でも差はある。"

💬 "こどもが頼ろうという気持ちが薄いと難しい。頼ろうという気持ちを持てる経験があると。退所してお金や生活のことで困ることは多い。行政、社会保障の仕組みについて知る機会があった。困ったときに誰に相談したら良いかもわからない。一人暮らししている子、施設等にもつながっていない子。相談する相手もいない。他の人との距離感の掴み方。"

事例紹介 —— 予防的な関わり

- 在籍🔥中からの継続的な金銭管理支援

💬 "施設にいたときから金銭管理が少し杜撰な子が多いのかなというところはありました。なので、そういう子に関しては率先してアフターケアという形で、4ヶ月に1回ぐらい子供たちに会って、お金どれぐらい使ってるのって在園中に1年ぐらいは通帳の管理どれぐらいか見さしてもらう"

- "児童手当を本人の同意を得て施設退所時に同意書を書かせてもらって、はぐくみ扱いにしているので、学費の管理に関しては一緒に行うことができるのが予防策というか5年前くらいに比べたら子供とお金のやり取りをしながら生活ができるようになった"

• 他の支援機関との早期連携

- "措置中からCANSが退所後の自立支援について一緒に考えてもらえるに関わってもらう中でその子のことをちゃんと知ってもらう、子どももその支援者のことを知って安心できる"
- "児相と施設との連携の標準化、少しずつ進んできているけれど、高校生のうちからつないでいく取組がもっとあると良いなど、措置解除等の際に急につながれても、関係性を築いていくにはそれなりのプロセス、時間が必要。"
- "自立した後も関わる人が多ければ、どっかに引っかかるんじゃないかなって思うところが...支援体制を作って関係者をいっぱい作っておくということが大事"
- "施設出た後もアウトリーチで支援できる機関が増えてきたのは心強いけれどそうした機関につながらない若者が大変、心配、そうした若者が親になると他の人を信頼できないということでその後の対応も苦労"

• 本人との関係性構築

- "毎日夕飯を食べに来るとか、食事の提供、毎週末外泊をうちで受け入れて...園内行事、園外の招待とか、何か行事があるときに一緒に連れて行って、参加をしたり"

● "現場のそれぞれのおうちのスマホとのラインを繋げておくことを今高校生はしているんですけども、それを繋げておくことによって、何かしらの連絡はそこに来ることができる"

● "ほそぼそと関係を紡いでいく（深いつながりはないにしても時折近況確認のメッセージを送るなど）"

● "ここに来る子っていろんなケース様々なんですけど、やっぱり比較的、ネグレクトとかDVじゃなくて、親の死別という子は結構しっかりしてるなとは感じます。大体がネグレクトや育児放棄とか虐待なので、そういう子はここにいる短い期間での支援がどこまでできるかって、その子その子のスピードも違うし、能力も違うので、難しいです"

■ 支援の実施状況

アフターケアの実践と工夫

・ 関係維持のための定期的なコンタクト

● "年賀状と暑中見舞いは必ず出して所在を確認しているのと、うちはふるさと便といって、年に2回、学校が始まって生活が不安定になってきた6月頃に手作りのご飯を冷凍して、アンケートを一気に送信して"

● "定期的に子供たちと面会することはやってます。子供によってですが大体1年やってみて、少しずつ頻度を減らしていく"

● "全員もれなく連絡する、連絡漏れを防ぐというやり方はしていない→それをするとなら「仕事」になってしまう、でもそういう付き合い方をしたいわけではないし、大人同士の関係、一緒に暮らし仲間としての関係をしていきたいということをホームにいる間に伝えている。"

- **居場所としての機能**

施設が退所後も重要な居場所として機能している例

● "里帰りで宿泊をするというのは一年中対応してますね。長期休暇のときとかではなくて、行きたいと言えれば来るという受け入れをしています。あと食事の無償提供というか、うちはお金も取らないし、もうご飯食べて帰ってきなさいとか"

- **手続上のサポート**

● "奨学金の管理とか学費の支払いっていう親を頼れない場合は、どちらか手続きを代わりになってしたり、振り込みをするとかっていうことをしてます。あと自立支援対象児童等貸付事業の継続申請を手伝ったり"

他機関との連携状況

- **社会的養護自立支援拠点事業所を中心とした連携**

● "キャンズさんはもちろん一番お願いして、連携させていただきたいなと思ってる機関だと思います"

● "キャンズさんには頼りにしております。うちも直近3人、今お世話になっていたりとかするので本当に心強く思っています"

- **個人的なネットワークを活かした就労支援の意義と限界**

- "ハローワークとも連携、面接に行けそうな子はそちらにおまかせしたり、それが難しそうな場合は個別に繋がっている会社に繋いだり、企業組合の作業の中で適正の見立て、就労にぽんとつながることはなかなか少ない、モラトリアムに付き合うしかない。一見うまく就職できたようにみえてもそのときだけでその後色々苦労する"

● "就労の手前段階にある若者（自分の思ったことを伝えられない等）の支援が圧倒的に足りていない、ボランティア等に若者を連れて行ったり、自分の事業所でならできても社協のボラセンを案内して行ける人はなかなかいない、就労に失敗した若者が再度就労にたどり着くまでが大変"

- **段階的な就労支援と就労定着支援の重要性**

● "就労支援色々なひとが関わった方が良い、キャリアカウンセリングの立場、福祉の立場、それぞれの視点、社会に出ていくプロセス"

- **障害のある若者への支援**

障害福祉サービスの課題について

● "インケアの段階から障害福祉の関わり、関わりたいけれどいろいろ限界はありそう。障害福祉サービスに明るい展望を持ちにくい。"

- "中核支援センターが知的障害や手帳がない子でも、その後の支援をしてくれる...そういうサービスがあると子供たちも、安心できるのかなと思いますし、我々も次にどこに繋いでいいかというのが明確"

障害福祉サービスの活用について

- "障害の手帳を持ってる子は障害の支援機関や行政につながりやすいかなと思います。グループホームや自立援助保護に行った子で繋がれる子は施設ホームと連絡を取り合ってます"
- "障害を持ってる子は地域の障害者福祉センターと一緒にやって、グループホームで生活して、そっちは結構繋がって一緒にやっています"

■ 現在の課題意識

人材・体制

マンパワーの不足や職員の異動や退職による支援の断絶

- "全ての相談だとか、課題と一緒にいくつになってもお手伝いしたいところですが、児童養護施設、職員が非常に潤ってるわけではないので、なかなか卒園生のその支援は片手落ちになりがち"
- "職員のサイクルが早くなって、年齢層もすごい二極化してて、3年目までと後は10年以上とかそういう現象がうちで起こってて、3年目までが辞めては入ってきてを繰り返してて"

支援の継続性の課題

- "最後見た担当が、直接のやり取りをやらしてもらって、アフターケアという形でやってるんですけど、事前に連絡をくれて相談という形はほとんどなく..."
- "担当職員が辞めてしまったときに、誰を頼っていいのか、施設を頼ってくれればいいんですけど、なかなか言いづらいというふうになってしまう"
- "施設職員の入れ替わりがあったり、頼っていた職員が離職しちゃったりとなると、継続したいけど、子供も僕たちも繋がれなくなっちゃったり"

支援の質

標準化の難しさ

- "アフターケアの中心が担ってるっていうことだったんですけど、実質では、やっぱりそれぞれの職員が繋がっている卒園生の対応をしているっていう形になるので、現場の職員がアフターケアもやるってなると、やっぱりこっちもこっちも兼ねるっていうのはなかなか難しい"

支援の範囲と限界

- "実際34~5歳の人も毎日電話が来たり、というもあるのでどこまでやったらいいのかという気持ちはありますね"
- "アフターケアのその距離感みたいな、こちらは別に一緒に生活というか、一緒にいた子なので、できる限り支援してあげたいしやっぱり心配だなんて気持ちはあるんですけども、どこまでそこをするか、相手がどこまでどう思ってるかっていうところで、その距離感というか、そういうのがすごく難しい"

制度・システムの課題

- "児童相談所の18歳バツサリがきつい。制度の線引。応援会議といいながらすりつけ会議。特別支援学校は卒業後も3年間はアフターフォロー。児相もその後アフターフォローが必要。"

■ ちば子ども若者ネットワークに寄せられた声

横のつながりの強化

ネットワークを通じて、情報共有や相談が活発に行われるようになり、支援者同士が互いに協力し合える環境他の支援者が抱えている課題を共有することで、自分たちが抱えている課題と共通している部分に気づき、孤独感が軽減されたという意見もありました。

一方で、ネットワークの活動や効果がまだ十分に浸透していないという意見や、より多くの関係機関や団体が参加し、連携を強化していくべきだという意見もありました。

意識変化の実感

- "2~3年という短いスパンで大きな変化を感じることは少ないが、10年前に比べればアフターケアについての意識が高まってきている、社会資源も増えているという実感。アフターケアにつなぐという当たり前という意識になってきている"

- "中核の中でアフターケアの話が特別感なく語られるようになってきた。18歳を超えた若者のケースについて市役所が主体的に動いてくれるようになった"

抱え込まない支援への変化

- "施設が外部機関を頼りながら、自分たちで抱え込まないでいくという意識が少しずつ芽生え始めている。退所後どうすればいいのかという思考の幅が増えているのではないか"

支援情報の共有・活用

支援の情報源としては、研修、ケースワーカー同士の実体験の共有、事例報告会、SNSなどが情報源として挙げられました。

多くの回答者が、支援情報量は増加しており、徐々に浸透してきていると感じていると回答しました。一方で、情報過多により重要な情報が見えにくくなっているという意見や、質の高い情報、特に体験談を伴った情報が必要であるという意見もありました。これらの課題を解決するために、必要な情報を適切な人々に届けるための、よりアクセスしやすいプラットフォームの必要性が提案されました。

- "研修で情報を得ている。ケースワーカー同士の実体験、コミュニケーションの中で浸透していく部分が多い。事例を具体的に聴くことによる情報。市外になると事例も少なくなり浸透具合も低い"

- "質的な情報のほうが必要。社会資源をこういう風に使いこなしたという体験談をセットとした社会資源情報。情報発信にもアドボカシーの要素が必要ではないか。若者たちと一緒に制度の解説をつくる。"

- "必要な情報が得られるようになっていいると感じる。困ったときには知り合い（安井さん）から情報を得る。そうじゃない人はまだまだ触れる機会がない。そういう途上の人でも触れられるプラットフォームみたいなものが必要。届いていないところにどう届けていけるか。まずはその入口を開けられた。それを続けていく。"

当事者の声を聴く取り組み

以前と比べて、子どもや若者の意見を丁寧に聴くことの重要性を認識するようになったという意見が多く聞かれました。ネットワークが主催するイベントや研修を通じて、当事者の声を聴く機会が増加し、その重要性を再認識するようになったという意見や、当事者が主体的に参加できるイベントが増えたことで子どもや若者の声を聴くだけでなく、彼らが力を発揮できる場を提供することの重要性を指摘する意見もありました。

支援現場での意識変化

- "聞いたものはしっかり大事にしないといけないなっていう反省をしました。それは本当に突き刺さりましたね。"
- "児相の中だけでも子ども・若者の意向を確認しようという話題は数年前から比べて増えている。施設の自立支援計画でも子ども若者の意向を重視しようとするところは増えている"

アプローチの多様化

- "立派な発表ができる当事者リーダーはつくらないほうがよい、予定調和的になりがち、自分たちの周りにいる無名のヒーローの声をたくさんそういうスタイルの声を聴くところが増えてきていると思う"

おわりに

今回、お話を聞かせてくださった支援者のみなさまのからは、若者たちへの深い思いと、よりよい支援を探そうとする熱意が伝わってきました。

社会に巣立っていく若者たちの道のりは、決して簡単なものではありません。でも、支援する人たちと若者たち自身の声に耳を傾け、一つずつ改善を重ねていけば、必ずより良い支援の形が見えてくるはずだと信じています。

この調査が、そんな一歩になれば嬉しく思います。